

島根大学構内遺跡第6・7次調査
(橋本地区1・2)

1999年

島根大学埋蔵文化財調査研究センター

序 文

島根大学の敷地内には、かつて薬師山古墳や菅田丘古墳等の存在が知られており、また大学周辺においても著名な遺跡が豊富に残っています。とりわけ、近隣の西川津遺跡やタテチヨウ遺跡等は、かつての宍道湖沿岸部に展開した低湿地遺跡として、膨大な量の遺物の存在が明らかにされ、全国的にも注目されています。同様に、敷地の大部分が宍道湖沿岸部にあたる島根大学においてもこうした遺跡の存在が予想されていたことから、平成6年4月に島根大学埋蔵文化財調査研究センターを発足させ、構内遺跡の発掘調査と研究に邁進してまいりました。

本書は、共同溝設営に伴って、平成9年3月から4月まで実施した構内遺跡第6次発掘調査成果と平成9年9月から平成10年1月まで実施した構内遺跡第7次発掘調査成果の研究報告書です。本書が、今後の埋蔵文化財に対する理解と研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査の開始以来、本書の刊行に至るまで、学内の関係者を始め、島根県教育委員会等各方面から多大な御協力、御支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成11年2月

島根大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 北川 泉

例　　言

1. 本書は、島根県松江市西川津町1060番地（旧字名：橋本）島根大学構内において実施した島根大学構内遺跡第6・7次発掘調査の報告書である。
2. 遺跡名称は島根大学構内遺跡、地区名は旧字名に従い橋本地区と呼称している。
3. 発掘調査は、共同溝設営工事に伴い実施した。
4. 第6次調査は、調査期間、1997年3月19日～4月25日、調査面積、約64m²である。
第7次調査は、調査期間、1997年9月19日～1998年1月27日、調査面積、約646m²である。
5. 発掘調査は、島根大学埋蔵文化財調査研究センターが実施した。体制は第1章に示している。
6. 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系Ⅲによった。
7. 遺物の洗浄、実測、製図は、会下和宏、埴生典子、模田楨久が行った。
8. 材化石樹種鑑定用のプレパラート作製は埴生が行い、鑑定、記載は能城修一氏に委託した。
10. 材化石の¹⁴C年代測定を島根大学汽水域研究センターに委託した。
11. 本書の原稿執筆は、第5章1を模田、それ以外を会下があたった他、以下の各氏、機関に玉稿を賜った。
第5章2 文化財調査コンサルタント株式会社
第5章3 能城修一（農林水産省森林総合研究所木材利用部）

（敬称略）

12. 本書の構成・編集は、田中義昭の指導のもとに会下が行い、埴生、模田が協力した。
13. 出土遺物と発掘調査に関わる記録類は、全て島根大学埋蔵文化財調査研究センターで保管している。
14. 調査及び本書の作成にあたっては、以下の方々に御協力・御指導を賜った。記してお礼申し上げます。

中川 寧（島根県埋蔵文化財調査センター） 中村唯史（日新技術株式会社）

西尾克己（島根県教育委員会） 矢野健一（辰馬考古学資料館）

渡邊正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

（敬称略）

本文目次

第1章 調査に至る経緯と組織

1 調査に至る経緯	1
2 島根大学埋蔵文化財管理運営委員会規則	3
3 調査研究組織	5
(1) 第6次調査	5
(2) 第7次調査	6

第2章 遺跡の環境と既往調査成果

1 地質構成と自然史	7
2 歴史的環境	9
3 島根大学構内遺跡の既往調査成果	11

第3章 第6次調査（橋本地区1）

第1節 調査の方法と経過	19
1 調査の方法	19
2 調査の経過	19
第2節 基本層序	21
第3節 自然流路と遺物	21
第4節 小結	26

第4章 第7次調査（橋本地区2）

第1節 調査の方法と経過	27
1 調査の方法	27
2 調査の経過	27
第2節 基本層序	28
第3節 自然流路・遺物	30
1 I・II区	31
(1) 第4層の遺物	31
(2) 第3層上面の自然流路・遺物	31
a 自然流路01	31
b 自然流路01'	43
c 自然流路02	45
(3) 第2層下位砂層の遺物	47

(4) 第2層の遺物	47
2 III区	50
(1) 第3層上面の自然流路・遺物	50
a 自然流路03	50
第4節 小結	50
第5章 島根大学構内遺跡（橋本地区）の古環境復元	
1 地質学的検討からみた橋本地区の古環境	53
2 島根大学構内遺跡第7次調査（橋本地区2）の花粉分析 （文化財調査コンサルタント株式会社）	58
3 島根大学構内遺跡第6・7次調査において出土した木材の樹種（能城修一）	62
第6章 まとめ	79

図 目 次

図1 調査区位置図（1/5000）	2
図2 穴道湖・中海周辺の地質（通産省地質調査所「松江地域の地質」1994より転載）	7
図3 島根大学構内遺跡周辺の地質	8
図4 1918（大正7）年の調査地周辺（1/20000）	14
図5 島根大学周辺の遺跡（1/25000）	15～16
図6 第6・7次調査区第3層上面平面図（1/600）	20
図7 第6次調査区第3層上面平面図・南壁断面図（1/90）	22
図8 第6次調査区自然流路埋土出土土器（1/3）	23
図9 第6次調査区自然流路埋土出土木製品（その1、1/3）	24
図10 第6次調査区自然流路埋土出土木製品（その2、1/3・1/6）	25
図11 第7次調査II区南壁断面図（1/120）	29
図12 第7次調査II区南壁断面拡大図（1/90）	30
図13 第7次調査II区第4層出土遺物（1/3）	31
図14 第7次調査I区第3層上面平面図・東壁断面図（その1、1/90）	32
図15 第7次調査I区第3層上面平面図・東壁断面図（その2、1/90）	33
図16 第7次調査I・II区第3層上面平面図・東壁断面図（その3、1/90）	34
図17 自然流路01内杭検出状態立面図（1/250）	35
図18 第7次調査I区第2層・自然流路01出土土器（1/3）	37
図19 第7次調査I区自然流路01・01'・II区自然流路02・第2層下位砂層出土土器（1/3）	38

図20 第7次調査I区自然流路01埋土出土木製品（その1、1／6）	39
図21 第7次調査I区自然流路01埋土出土木製品（その2、1／6）	40
図22 第7次調査I区自然流路01埋土出土木製品（その3、1／3）	41
図23 第7次調査I区自然流路01埋土出土木製品（その4、1／3）	42
図24 第7次調査I区自然流路01埋土出土木製品（1／3）	44
図25 第7次調査II区第3層上面平面図（1／90）	46
図26 第7次調査II区自然流路02出土木製品（1／3・1／6）	48
図27 第7次調査II区自然流路02出土木製品（杭群、1／6）	49
図28 第7次調査III区第3層上面平面図・北壁断面図（1／90）	51
図29 第7次調査III区自然流路03下底面出土木製品（1／3）	51
図30 島根大学構内遺跡の周辺地形と調査地点およびボーリング地点	53
図31 ボーリング柱状図	54
図32 第6・7次調査区の模式層序	54
図33 試料採取地点	58
図34 花粉ダイヤグラム	61

表 目 次

表1 出土遺物観察表	52
表2 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の樹種	67
表3 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材一覧	68
表4 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の写真リスト	70

図版目次

- 図版1 遺跡（第6次調査） 1 調査区遠景（第3層上面、東から）
2 調査区南壁断面（北東から）
- 図版2 遺跡（第6次調査） 1 第3層上面全景（東から）
2 自然流路埋土遺物出土状態（北東から）
- 図版3 遺物（第6次調査） 1 自然流路埋土出土土器（1／3）
2 自然流路埋土出土木製品（1／3）
- 図版4 遺物（第6次調査） 自然流路埋土出土木製品（1／3・1／6）
- 図版5 遺跡（第7次調査Ⅰ区） 1 第3層上面全景（自然流路01、北から）
2 自然流路01（J～Nグリッド、北から）
- 図版6 遺跡（第7次調査Ⅰ区） 1 自然流路01内杭検出状態（E 2グリッド、西から）
2 自然流路01埋土木製品出土状態（F 2グリッド、北西から）
- 図版7 遺跡（第7次調査Ⅰ・Ⅱ区） 1 自然流路01埋土木製品出土状態（G 2グリッド、西から）
2 自然流路01'（北東から）
- 図版8 遺跡（第7次調査Ⅱ区） 1 自然流路02（北東から）
2 自然流路02内杭群検出状態（M20～21グリッド、南西から）
- 図版9 遺跡（第7次調査Ⅲ区） 1 第3層上面全景（南西から）
2 調査区北壁断面（南から）
- 図版10 遺物（第7次調査） 1 第4a層出土遺物（1／3）
2 自然流路01出土土器（1／3）
3 第2層下位砂層出土土器（1／3）
4 第2層・自然流路01出土土器（1／3）
- 図版11 遺物（第7次調査） 1 自然流路01・01'・02出土土器（外面、1／3）
2 自然流路01・01'・02出土土器（内面、1／3）
- 図版12 遺物（第7次調査） 1 自然流路01埋土出土木製品（1／6）
2 自然流路01埋土出土木製品（1／3・1／6）
- 図版13 遺物（第7次調査） 1 自然流路01埋土出土木製品（1／3）
2 自然流路01埋土出土木製品（1／3・10は1／4）
- 図版14 遺物（第7次調査） 1 自然流路02出土木製品（1／3）
2 自然流路02出土木製品（1／6・24は1／8）
3 自然流路03出土木製品（1／3）

第1章 調査に至る経緯と組織

1 調査に至る経緯

島根大学構内では、1994年度から埋蔵文化財調査研究センターを発足させ、構造物建設工事に伴って、第1～5次の発掘調査を継続実施している。

その結果、本構内が縄文早期末～近代における低湿地遺跡であることが判明し、一定の諸成果が得られるに至った。本遺跡は、いわゆる古宍道湾ないし古宍道湖の沿岸部に該当することから、水辺環境を舞台とした人類活動の展開相についてを課題の一機軸にそえて調査研究を進めている。加えて、本遺跡の成果が、周辺近隣の金崎古墳、薬師山古墳、西川津遺跡等、著名な遺跡調査成果についても補完的役割を果たすと考えている。

本書で報告する、第6次調査区、第7次調査I・II区は、総合理工学部校舎に供給する電気、ガス、水道等のライフラインを一括して納める共同溝設営に、また、第7次調査III区は、水槽埋設に先だって実施されたものである。

第6次調査区、第7次調査I・II区は連続しており、第2次調査区（現総合理工学部3号館）の西側に隣接している（図1・6）。第7次調査III区は、第2次調査区の南約15mに位置している（図6）。

総合理工学部3号館新営に先だって、1995年度に実施した第2次調査では、縄文期に形成されたと想定される砂洲が検出され、これを生活面として弥生～近代の遺構が営まれていることが判明している。第2次調査区に隣接する本次調査区でも、同様の層序関係が想定され、既往成果の追認及び、新たな考古学的解明に期待が持たれた。

上記の課題を認識し、1997年3月から第6次調査、1997年9月から第7次調査を開始した。



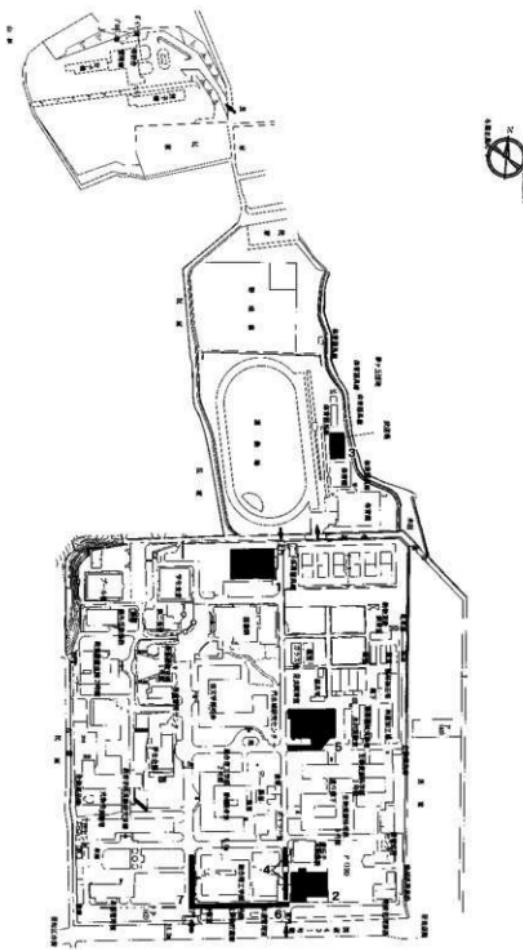


図1 調査区位置図（1／5000）

1. 第1次調査地；第2体育館
2. 第2次調査地；総合理工学部3号館1
3. 第3次調査地；武道場
4. 第4次調査地；共同溝
5. 第5次調査地；生物資源科学部1号館
6. 第6次調査地；共同溝
7. 第7次調査地I・II区；共同溝

2 島根大学埋蔵文化財管理運営委員会規則

(平成6年島大規則第9号)

[平成6年4月22日制定]

(趣旨)

第1条 島根大学構内の埋蔵文化財（以下「埋蔵文化財」という。）の発掘調査及び修復保存に関する重要事項を審議するため、島根大学に島根大学埋蔵文化財管理運営委員会（以下「管理運営委員会」という。）を置く。

(審議事項)

第2条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる事項について企画し、審議し、及び決定する。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に係る基本計画に関すること。
- 二 埋蔵文化財の修理保存に係る基本計画に関すること。
- 三 その他埋蔵文化財に関する重要な事項

(組織)

第3条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 学長
- 二 各学部長
- 三 第7条第3項に規定する副センター長及び同条第1項に規定する研究員のうちから1名
- 四 各学部教官代表 各1名
- 五 事務局長

- 2 前項第3号に掲げる研究員である委員は、学長が選考する。
- 3 第1項第4号に掲げる委員は、学部長の推薦に基づき学長が任命する。
- 4 第1項第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補次の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 5 委員会に委員長を置き、委員長は、学長をもってこれに充てる。

(会議)

第4条 委員会は、委員長が召集し、議長は、委員長をもってこれに充てる。

- 2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。
- 3 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、出席委員の過半数をもって議決する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員会が必要と認めたときは、委員会に委員以外の者を出席させ、その意見を聞くことができる。

(調査研究センター)

第6条 管理運営委員会の下に、埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存に当たるため、埋蔵文化財調

査研究センター（以下「調査研究センター」という。）を置く。

（調査研究センターの組織）

第7条 調査研究センターに次の各号に掲げる職員を置く。

一 研究員 埋蔵文化財の専門的知識を有する教官若干名

二 調査員 埋蔵文化財の専門的知識を有する教官1名

三 調査補助員 必要に応じて採用する非常勤職員

2 調査研究センターにセンター長を置き、センター長は学長をもってこれに充てる。

3 調査研究センターに副センター長を置き、副センター長は第1項に規定する研究員のうちから学長が任命する。

4 センター長は、調査研究センターの管理・運営を総括する。

5 副センター長は、センター長を補佐し、埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存の指導・監督を行なう。

（研究員及び調査員）

第8条 研究員及び調査員は、当該教官の所属する学部長等の承諾を得て、学長が任命する。

2 研究員は、必要に応じて埋蔵文化財の調査研究を行う。

3 調査員は、副センター長の指導の下に専ら埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存に当たる。

（報告）

第9条 副センター長は、埋蔵文化財の発掘調査を終了したときは、センター長を経て管理運営委員会に調査結果を報告するものとする。

（事務）

第10条 管理運営委員会の事務は、庶務課が処理し、調査研究センターの事務は、施設課において処理する。

（雑則）

第11条 この規則に定めるもののほか、管理運営委員会に関し必要な事項は、管理運営委員会において定める。

3 調査研究組織

(1) 第6次調査

(平成9年3月19日～平成9年3月31日)

管理運営委員会

委 員 長	学 長	北川 泉	教 育 学 部 長	中川 政樹
委 員	法 文 學 部 長	岡崎 勝彦	生物資源科学部長	本田 雄一
	総合理工学部長	吉川 通彦	教育学部教授	相良 英輔
	法文学部助教授	松井 嘉徳	生物資源科学部 教 授	仙田久仁男
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	研 究 員	渡邊 貞幸
	副センター長	田中 義昭		
事 務 局 長	佐竹 良夫			

埋蔵文化財調査研究センター

センター長	学 長	北川 泉		
副センター長	法文学部教授	田中 義昭		
研 究 員	法文学部教授	渡邊 貞幸	教育学部教授	林 正久
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	総合理工学部教授	時枝 克安
	生物資源科学部 教 授	片桐 成夫	汽 水 域 研 究 セ ジ ン タ ー 助 手	竹廣 文明
事 務 局 施設課長	齊藤 健次			
調 査 員 助 手	會下 和宏			
調査補助員	埴生 典子	模田 植久		

(平成9年4月1日～4月25日)

管理運営委員会

委 員 長	学 長	北川 泉	教 育 学 部 長	中川 政樹
委 員	法 文 學 部 長	岡崎 勝彦	生物資源科学部長	本田 雄一
	総合理工学部長	吉川 通彦	教育学部教授	相良 英輔
	法文学部助教授	松井 嘉徳	生物資源科学部 教 授	仙田久仁男
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	研 究 員	渡邊 貞幸
	副センター長	田中 義昭		
事 務 局 長	佐竹 良夫			

埋蔵文化財調査研究センター

センター長	学長	北川 泉		
副センター長	法文学部教授	田中 義昭		
研究員	法文学部教授	渡邊 貞幸	教育学部教授	林 正久
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	総合理工学部教授	時枝 克安
	生物資源科学部教授	片桐 成夫	汽水域研究センター助手	竹廣 文明
事務局	施設課長	齋藤 健次		
調査員	助手	會下 和宏		
調査補助員		埴生 典子	模田 植久	

(2) 第7次調査

(平成9年9月19日～平成10年1月27日)

管理運営委員会

委員長	学長	北川 泉		
委員	法文学部長	岡崎 勝彦	教育学部長	中川 政樹
	総合理工学部長	吉川 通彦	生物資源科学部長	本田 雄一
	法文学部助教授	松井 嘉徳	教育学部教授	相良 英輔
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	生物資源科学部教授	仙田久仁男
	副センター長	田中 義昭	研究員	渡邊 貞幸
事務局長	伊藤 良昭			

埋蔵文化財調査研究センター

センター長	学長	北川 泉		
副センター長	法文学部教授	田中 義昭		
研究員	法文学部教授	渡邊 貞幸	教育学部教授	林 正久
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	総合理工学部教授	時枝 克安
	生物資源科学部教授	片桐 成夫	汽水域研究センター助手	竹廣 文明
事務局	施設課長	齋藤 健次		
調査員	助手	會下 和宏		
調査補助員		埴生 典子	模田 植久	

第2章 遺跡の環境と既往調査成果

1 地質構成と自然史

本遺跡の所在する出雲地域は、大別的には、日本海に臨む島根半島、宍道湖・中海といった汽水域沿岸部、山陽地方につながる中国山地等によって構成されている。

宍道湖・中海は、後水期における海水準変動の関与によって、三角州や砂州が内湾を閉塞した跡湖で、その過程については、時代ごとの具体的な古地形が復元されつつある¹¹⁾。縄文海進期の本地域は、概略的には、現在の宍道湖が大社湾と繋がった古宍道湾（仮称）と中海が美保湾と繋がった古中海湾（仮称）とからなり、その沿岸部は、浅海性砂泥底で樹枝状のおぼれ谷が形成されていたとみられる。

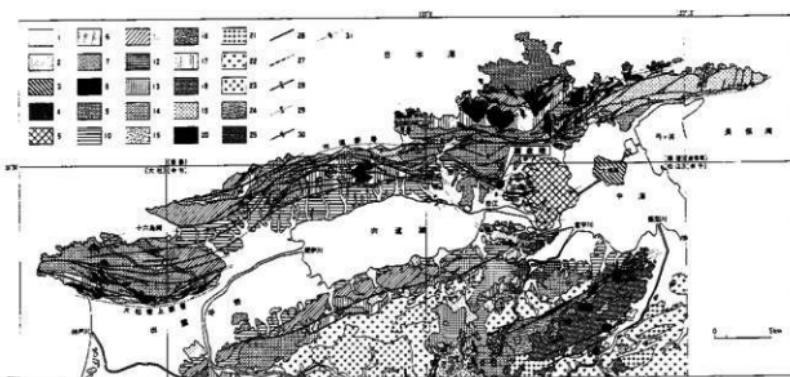


図2 宍道湖・中海周辺の地質（通産省地質調査所「松江地域の地質」1994より転載）

松江及び周辺地域の地質図 豊野・吉田（1985）豊野・中野（1985, 1986）、豊野ほか（1989, 1991）及び本報告の地質図より編集。1～4＝黒四系、5～19＝中新統、20～23＝古第三系、24＝上部白亜系、25＝時代末群の変成岩類。1＝完世堆積物及び埋立地、2＝更新世堆積物、3＝大根島玄武岩、4＝野呂玄武岩、5＝和久麗山安山岩、6＝和久麗山アルカリ玄武岩－細面安山岩溶岩、同火碎石及びそれらの再堆積物、7＝松江層の砂岩、シルト岩など、8＝塩基性・中性貫入岩、9＝高美山層、10＝古江原及び布志名層、11＝牛切層及び大森層のデイサイト－波紋岩溶岩、火碎岩、15＝成相寺層及び川合層、久利層のデイサイト火碎岩とそれらの再堆積物、16＝成相寺層及び川合層、久利層の安山岩溶岩、火碎岩、17＝成相寺層及び川合層、久利層の碎屑岩、18＝波多層の安山岩溶岩・火碎岩、デイサイト火碎岩及びそれらの再堆積物、19＝古瀬層、20＝石英斑岩及び花崗斑岩の岩脈、21＝下久野花崗岩、22＝鶴花花崗岩及び布都花崗岩、23＝大東花崗岩、24＝八雲火成岩及び上島火成岩、25＝上東東変成岩及び鳥羅郡変成岩、26＝断層、27＝推定断層（破線）及び伏在断層（点線）、28＝背斜、29＝伏在背斜、30＝向斜、31＝伏在向斜。

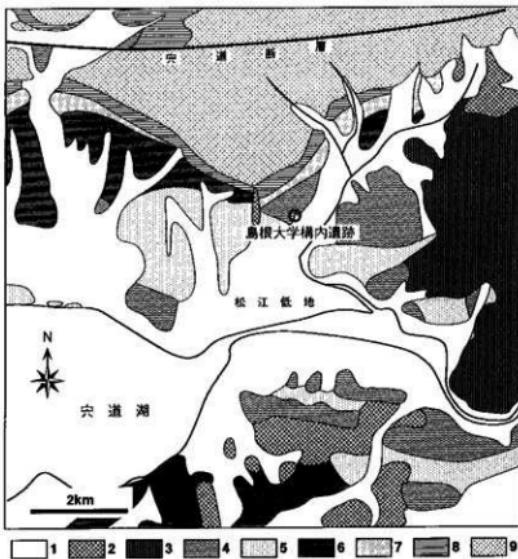


図3 島根大学構内遺跡周辺の地質（中村唯史氏作図）

- 1 完新統
 - 2 段丘堆積物
 - 3 和久瀬山安山岩
 - 4 松江層玄武岩
 - 5 松江層砂岩
 - 6 布志名層泥岩
 - 7 大森層砂岩・頁岩および礁岩
 - 8 久足・川合層頁岩
 - 9 久足・川合層泥灰岩・石英安山岩溶岩および同質火成岩
- （島根県地質図編集委員会編、1982をもとに作成）

本遺跡は、宍道湖北東側の松江低地部北縁に位置している。松江低地は、朝酌川の下流に形成された小規模な沖積地で、この地下には、軟弱な完新統中海層泥層が分布し、宍道湖湖底、出雲平野下に連続している^⑤。

中海層泥層中には、内湾性の貝化石や、アカホヤ火山灰（K-A h）層^⑥が挟在しており、古環境復元の有力な資料となっている。アカホヤ火山灰層は、島根大学構内遺跡（橋繩手地区）の調査成果によって、纖維土器包含層と森B式包含層の間に挟在していることが確認されており、その降灰は、概して、縄文早期末と前期初頭の移行期に求められる。ところで、日本海採取の海底コアをもとにした有孔虫殻酸素同位体比の検討によれば、温暖化に伴う縄文海進によって少なくともアカホヤ火山灰降下時までには、日本海に対馬暖流が本格的に流入、現在の日本海域と同様の海洋・気候環境形成をみていたと推定されている^⑦。この仮説を肯定すれば、縄文前期における本地域は、既に温暖湿潤な日本海型の気候環境であったことが想定出来よう。

遺跡周辺の植生史については、これまでのボーリング調査や、西川津遺跡、島根大学構内遺跡等の資料によって復元されつつある¹⁶。縄文早期末～前期前半頃の植生を要約的に述べると、古宍道湾水辺には、イネ科の草本が繁茂しており、流入河川沿いには、エノキ、ムクノキ、ケヤキを要素とする河畔林が存在していたと想定されている。また、島根大学構内遺跡周辺の陸域には、暖温帯中の二次林と考えられるコナラ、クマシデを要素とした落葉樹林の存在が推定される。一方、東隣の朝酌川流域、西川津遺跡周辺では、クロマツを要素とする海岸林、ないしアカマツを要素とする二次林の存在が想定されている。

2 歴史的環境

島根県は、山陰地方の西方に位置し、旧国制では、県東部「出雲」と県西部「石見」、日本海に浮かぶ「隱岐」より成る。日本海に突出した島根半島は、九州地域や北陸地域等との沿岸交流の結節点的役割をなし¹⁷、加えて、山越えルートによる山陽、近畿地域との交流も頻繁であったといえる。こうした周辺地域との文物交流が認められる一方で、青銅器大量埋納¹⁸や弥生後期土器様式、墓制¹⁹に代表される様に、地域性を強く発揮していることも看取される。

以下、本遺跡周辺を中心に、出雲地域の遺跡を、通時的に瞥見する。

旧石器時代 西川津遺跡、タテチョウ遺跡で尖頭器、細石刃核が出土しているが、明確な遺跡は知られていない。

縄文時代 本地域では、現状で、縄文早期末織維土器の時期から、本格的な遺跡形成の開始が認識されている。当該期の遺跡は、森林と汽水域、河川等、異なる環境の遷移帶付近に設営される傾向があり、縄文人の複合的、総合的な資源利用をうかがうことが出来る。こうした資源利用の中核をなすのが、古宍道湾、古中海湾を主要なテリトリーとした「内湾性漁業」の展開で、そのことは、遺跡から出土する魚貝類遺存体²⁰や漁撈貝、丸木舟、石器組成によって端的に示されていよう。

前期初頭段階になると、九州地域や朝鮮地域等で出土する轟B式土器が、山陰地域の遺跡でもみられ、海洋を介した該期の広域的交流がうかがえる。本遺跡から北東約900mに位置する西川津遺跡（海崎地区）²¹で出土した前期初頭の土器群は、刺突文、押引文、隆帯文など多用な様相を示しており、九州轟B式の他、近畿地域前期初頭土器との関連も指摘されている。また、宍道湖北側に位置する佐太講武貝塚は、縄文前期に所属する日本海側では希少な貝塚として、早くから著名である²²。後続する羽島下層II式段階以降は、近畿、中国地域の齊一的な土器圏に包摂されていくが、九州曾畠式土器等も点的に散見出来る。宍道湖、中海沿岸では、中期の遺跡が比較的希薄であるのが特徴的で、該期の遺跡は米子市目久美遺跡²³、陰田遺跡²⁴、安来市島田黒谷I遺跡²⁵等、中海南岸地域でのみしか認められていない。こうした早期から中期にかけての遺跡の消長については、水域沿岸部生産領域の生態系や植生等、食料資源獲得上の生態諸条件の推移に大きく規定されていたと

予察され⁸、今後の古環境復元成果が問題とされるところである。

後期以降は、古穴道湾の埋積進行による出雲平野形成に馴化して、沖積地にも遺跡が形成される様になり、例えば、湖陵町三部竹崎遺跡⁹、出雲市三田谷遺跡¹⁰、矢野遺跡¹¹、大社町原山遺跡¹²等がある。また、中海北岸には、美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡¹³、崎ヶ鼻洞窟遺跡¹⁴、権現山洞窟遺跡¹⁵、小浜洞窟遺跡¹⁶等の海蝕洞窟遺跡が存在し、後期を中心とした遺物が出土している。近隣の朝酌川流域、西川津遺跡、タテチョウ遺跡¹⁷からも後～晚期諸型式の土器が出土している。

弥生時代 前記した西川津遺跡、タテチョウ遺跡が著名である。

西川津遺跡では、前・中期の掘立柱建物跡、貯蔵穴、木製農耕具保管施設、貝塚等の検出をみており、前～後期における大量の土器、土笛、ヒヨウタン製容器、ゴホウラ製貝輪、結合式釣針、二条突帯鑄造鉄斧片等、特筆される遺物も出土している。こうした成果は、付近に、手工業生産、交易、祭祀等の機能を具備した「拠点的」集落¹⁸の存在を想定させる。当地域における初期農耕の生成、進展の過程や拠点的集落の様相、特質を追及する上で、重要な位置を占める。

古墳時代 本遺跡西側の菅田丘陵に、薬師山古墳¹⁹、小丸山古墳²⁰、菅田丘古墳²¹などが存在していたが、いずれも消滅している。

薬師山古墳は、1922（大正11）年の夏、島根大学の前身である旧制松江高等学校の学生寮北方で土取り工事が行われた際に発見され、武田雄三氏の尽力によって出土遺物が保護された。本古墳は、一種の箱式棺を主体としたものと考えられ、做製四乳鏡、刀、鐵鎌、滑石製有孔円板、須恵器等が出土している。

また、東側の金崎丘陵には、2基の前方後方墳と9基の方墳で構成される金崎古墳群²²が存在していたが、一部は破壊されて、現在は国指定の1～5号墳のみ残存している。このうち、1号墳は、1947（昭和22）年8月、梅原末治氏、山本清氏等によって発掘調査されている。全長約32mの前方後方墳で、竪穴式石室（竪穴系横口式石室とみる説もある）を主体部にもち、副葬品として做製内行花文鏡1、勾玉（碧玉5、メノウ6）、碧玉管玉4、碧玉臺玉2、ガラス小玉多數、滑石白玉多數、滑石製子持勾玉2、大刀1、須恵器（はそう4、長頸壺1、連管五壺1、高坏7、筒型器台1）等が発見されている。本墳及び薬師山古墳出土の須恵器は、山本清氏によって山陰須恵器編年I期の模式とされた²³。

また、朝酌川流域の西川津遺跡、原の前遺跡²⁴、タテチョウ遺跡では該期にも遺物出土が認められ、付近に集落の存続していたことが推定される。その他、提廻遺跡では、低丘陵斜面から、18棟の竪穴住居跡が検出されており、該期集落の実相を知る上で貴重である²⁵。

奈良時代以降 前記した朝酌川流域の遺跡で、大量の遺物出土をみている。このうち、原の前遺跡では、緻密な調査によって古墳前期から平安時代までの朝酌川河道変遷が把握され、平安時代の人形、箸（斎申）状木製品、舟形木製品等、律令祭祀に関わる遺物や長さ4.38mの橋脚等が出土している。

3 島根大学構内遺跡の既往調査成果（図1・図4）

島根大学構内遺跡は、松江市市街地の北東郊外、薬師山古墳等が占地する菅田丘陵と金崎古墳群が占地する金崎丘陵の谷部に位置し、丘陵裾部や低湿地一帯にかけての広範囲に形成されている。前記した朝酌川流域の西川津遺跡、原の前遺跡、タテチョウ遺跡とも隣接している。

縄文海進期には海岸線が遺跡内まで進入しており、古宍道湾、古宍道湖最奥部付近の水辺に展開した遺跡である。特に縄文遺跡においては、局地的な微地形復元や植生復元等が、生業、居住、移動の諸形態を検討する際、有用となる立場にたって⁹、理化学的な調査研究も同時に進める様、務めている。

第1次調査（橋繩手地区1）¹⁰ 菅田丘陵の東側裾部と沖積地の変換部にあたる。アカホヤ火山灰層（約6300年前）を挟んで、下位から縄文早期末纖維土器が、上位から縄文前期初頭轟B式土器が、層位的に分離して検出され、縄文前期初頭～前半に比定される丸木舟推定板材が出土した。

第2次調査（諸田地区1）¹¹ 第1次調査地の南約300mに位置する。水域の沿岸流によって、西側から東側へ伸長する縄文晩期の砂州が検出された。また、縄文前期以降の海成層中からは、現地性のシジミ死滅貝が多量に検出されており、当該期の水域が、シジミの再生産される砂泥底の水環境であったことが判明している。

第3次調査（深町地区1）¹² 第1次調査地の北東約120mに位置し、金崎丘陵の西側裾部と沖積地の変換部にあたる。縄文前期に比定される完形の櫂2本・棒状木製品1本が並べて置かれた状態のまま出土した。上位からは、弥生中期初頭の流路状遺構が検出され、付近における居住域、生産域の存在が予測される。

第4次調査（諸田地区2） 第2次調査区の西側に隣接する。第2次調査で判明した縄文期の砂洲上面で自然流路が検出され、下底面から縄文晩期突堤文土器が出土した。

第5次調査（京田地区1）¹³ 第2次調査区の北約120mに位置する。調査区内は、縄文晩期頃を境に水域から後背湿地に変遷したことが判明している。

参考文献

- (1) 德岡隆夫・大西郁夫・高安克己・三梨昂「中海・宍道湖の地史と環境変化」『地質学論集』36 1990年
小畠浩『中国地方の地形』古今書院 1991年
- 徳岡隆夫・中村唯史他「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『汽水域研究』3 島根大学汽水域研究センター 1996年
- 林正久「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』3 島根県古代文化センター 1996年
- 田中義昭「山陰地方における弥生時代の海水準について—遺跡立地からの検討—」『島根大学地域資源環境学研究報告』15 1996年
- (2) 中村唯史「1 地理的環境」『島根大学構内遺跡第1次調査（橋繩手地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究セ

ンター 1997年

- (3) 中村唯史・徳岡隆夫「宍道湖ボーリングS B 1から発見されたアカホヤ火山灰と完新世の古地理変遷についての再検討」『島根大学地球資源環境学研究報告』15 1996年
- (4) 新井房夫・大場忠道ほか「後期第四紀における日本海の古環境」『第四紀研究』20-3 1981年
大場忠道「日本海の環境変化」『文明と環境』10 朝倉書店 1995年
- (5) 大西郁夫「中海・宍道湖底表層コアの花粉分析と環境変遷」『山陰地域研究(自然環境)』2 島根大学汽水域研究センター 1986年
大西郁夫・渡辺正巳「松江市西川津町タチヲウ遺跡の花粉分析」『山陰地域研究(自然環境)』3 1987年
大西郁夫・原田吉樹・渡辺正巳「松江市西川津遺跡の花粉分析」『山陰地域研究(自然環境)』5 1989年
大西郁夫・下場秀樹・中谷紀子「宍道湖底下完新統の花粉群」『島根大学地質学研究報告』9 1990年
大西郁夫「中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉帯と種生変化」『地質学論集』39 1993年
渡辺正巳・会下和宏「島根大学構内遺跡第1次発掘調査における花粉分析」『山陰地域研究(自然環境)』13 1997年
- (6) 松本岩雄「荒神谷遺跡出土の遺物と地域間交流」『古代王権と交流』7 名著出版 1995年
渡辺貞幸「『出雲連合』の成立と再編」『同上』1995年
- (7) 松本岩雄・足立克巳編『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会 真陽社 1996年
田中義昭「加茂岩倉遺跡の発見とその意義」『会誌 歴史地名通信』22 1997年
渡辺貞幸「青銅器大量埋納期の出雲」『東アジアの古代文化』93 1997年
- (8) 田中義昭・渡辺貞幸他「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」島根大学法文学部考古学研究室 1992年
- (9) 竹広文明「汽水域周辺の生業 -繩文、弥生時代における中海・宍道湖周辺の漁撈活動-」『海跡湖堆積物からみた汽水域の環境変化 -その地域性と一般性- 平成7年度報告・資料集』1996年
- (10) 内田律雄他「朝御川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書I~V」島根県教育委員会 1980~1989年
中川寧「朝御川中小河川改修工事区域内発掘調査概報 よみがえるあさくみがわのながれ」島根県教育委員会 1997年
- (11) 山本清「佐太講武貝塚」『講武村史』1955年
赤澤秀則・竹広文明他『佐太講武貝塚発掘調査報告書』2 1994年
- (12) 米子市教育委員会他『加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 目久美遺跡』1986年
- (13) 米子市教育委員会他『一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 陰田』1984年
- (14) 島根県教育委員会他『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡 一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV』1994年
- (15) 会下和宏「島根大学構内遺跡にみる『繩文海進』とその社会的影響」『社会システム論集 島根大学法文学部紀要社会システム学科編』1 1996年
- (16) 野坂俊之・角田徳幸他「神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 御領田遺跡・三部竹崎遺跡」湖陵町教育委員会 1994年
- (17) 島根県教育委員会「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」1980年
- (18) 池田満雄・足立克己「出雲市矢野遺跡出土の繩文土器」『島根考古学会誌』4 1987年
- (19) 村上勇・川原和人「出雲・原山遺跡の再検討 -前期弥生土器を中心として-」『島根県立博物館調査報告』第2冊 1979年
- (20) 竹広文明他「島根半島洞窟遺跡の研究 -島根県八束郡美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡の試掘調査-」『汽水域研究』3 1996年

- 竹広文明他「サルガ鼻煙台洞窟遺跡の第1次発掘調査」『汽水域研究』4 1997年
- ② 佐々木謙・小林行雄「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡－中海沿岸縄文式文化の研究1－」『考古学』8-10 1937年
山本清「美保關町サルガ鼻・権現山洞窟住居跡について」『島根県文化財調査報告書』第3集 1967年
- ② 文献20に同じ。
- ③ 山本清「山陰地方の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 1967年
- ④ 柳浦俊一他「朝鈴川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書I～IV」島根県教育委員会 1979～1992
岡崎雄二郎他「タテチョウ遺跡調査報告書」松江市文化財調査報告書第51集 松江市教育委員会 1992年
- ⑤ 田中義昭「弥生時代拠点集落の再検討」『考古学と遺跡の保護 甘粕健先生退官記念論集』 1996年
田中義昭「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究』12 1996年
- ⑥ 山本清「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集（人文科学）』5 1955年
- ⑦ 宍道正年「島根大学敷地裏丘陵の古墳群について」『菅田考古』11 島根大学考古学研究会 1969年
- ⑧ 山本清「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」『山陰文化研究紀要』17 1977年
- ⑨ 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『山陰古墳文化の研究』 1971年
山本清「遺跡と歩んだ70年 古代出雲の考古学」ハーベスト出版 1995年
- 岡崎雄二郎他「史跡金崎古墳群 昭和52年度環境整備事業報告書」松江市教育委員会 1978年
- ⑩ 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』1960年
- ⑪ 西尾克己他「朝鈴川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡」島根県教育委員会 1995年
- ⑫ 萩雅人他「提廻遺跡」松江市教育委員会 1987年
- ⑬ 井上智博「縄紋時代における遺跡群の動向と生業 早期末～前期前葉の山陰地方を例として」『研究調査報告』第1集 大阪府文化財調査研究センター 1997年
- ⑭ 会下和宏編「島根大学構内遺跡第1次調査（橋綱手地区1）」島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
会下和宏編「島根大学構内遺跡発掘調査概報Ⅰ」島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- ⑮ 会下和宏編「島根大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ（諸田地区1）」島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1996年
- ⑯ 会下和宏編「島根大学構内遺跡第3次調査（深町地区1）」島根大学埋蔵文化財調査研究報告第2冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1998年
- ⑰ 会下和宏編「島根大学構内遺跡第5・9次調査（京田地区1・諸田地区4）」島根大学埋蔵文化財調査研究報告第4冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1999年（刊行予定）

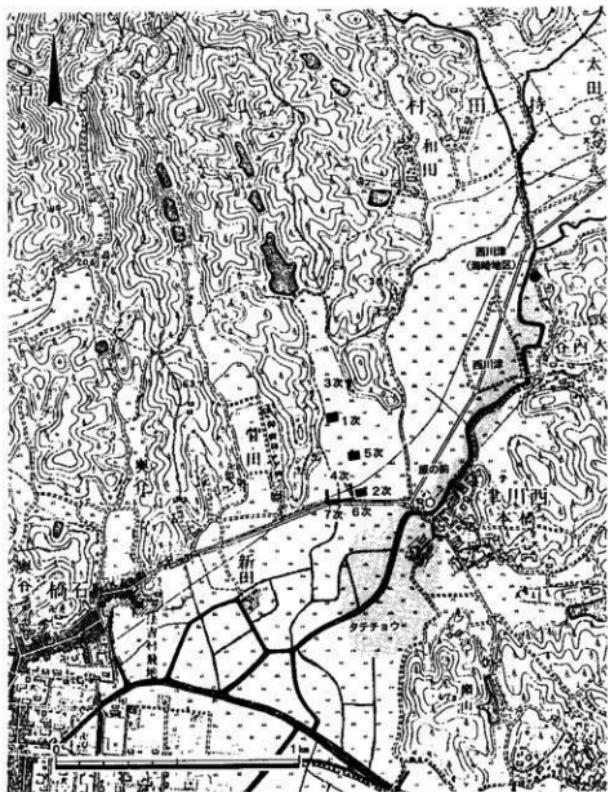


図4 1918(大正7)年の調査地周辺(1/20000)

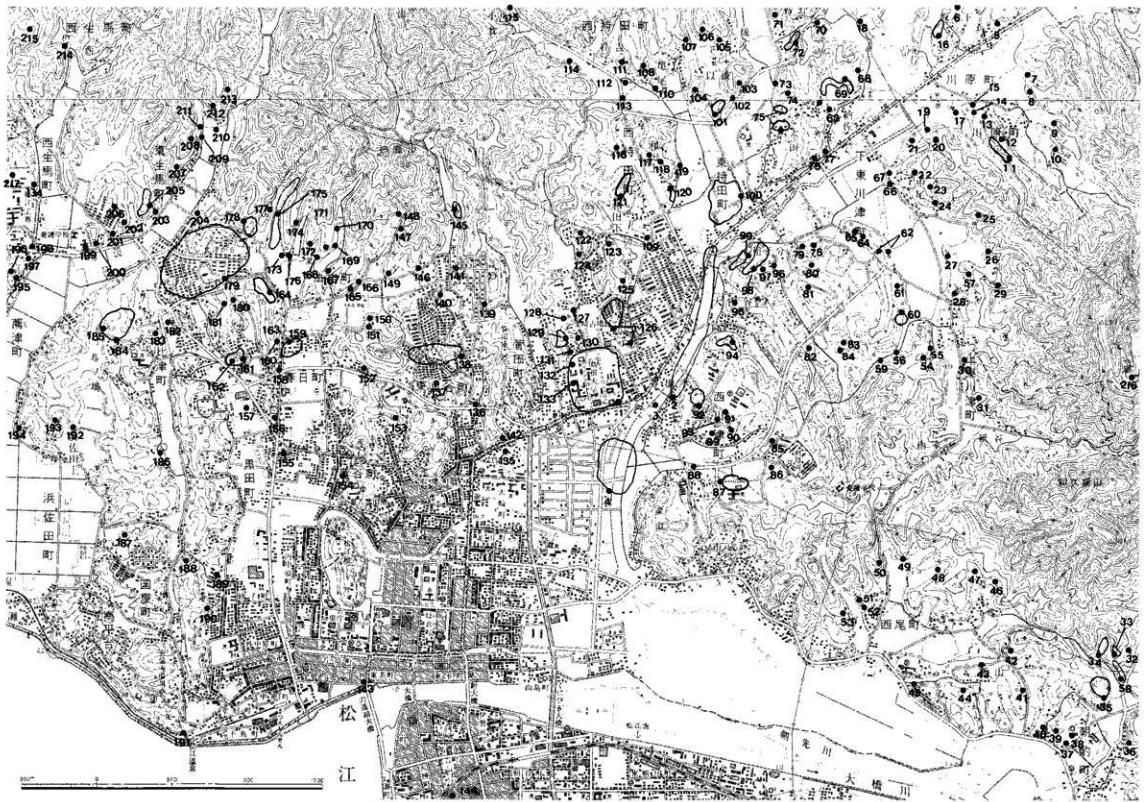


図5 島根大学周辺の遺跡 (1/25000)

周辺遺跡（図5）

1. 島根大学構内遺跡
2. 西川津遺跡
3. 原の前遺跡
4. タテチヨウ遺跡
5. 流田遺跡
6. 小林古墳群
7. I 2 4 古墳群
8. I 1 8 古墳群
9. I 2 7 遺跡
10. I 1 9 遺跡
11. 後谷古墳群
12. 荒神古墳
13. I 2 0 遺跡
14. I 2 2 遺跡
15. 川原庄の上横穴群
16. 香々廻古墳群
17. I 2 1 遺跡
18. 常熊古墳
19. 小松谷古墳
20. J 5 7 古墳群
21. J 5 5 古墳
22. J 3 7 古墳
23. J 3 6 古墳
24. J 3 5 遺跡
25. 仁王ヶ谷横穴群
26. 向屋敷横穴群
27. J 1 8 遺跡
28. 西宗寺古墳
29. 山根横穴
30. 嵩山麓遺跡
31. 卷遺跡
32. 九日宮古墳群
33. 邊倉横穴群
34. 藤谷B遺跡
35. 週原古墳群
36. 朝酌上神社跡古墳
37. 朝酌小学校前古墳
38. 朝酌小学校校庭古墳
39. 新山遺跡
40. 松ヶ鼻窓跡
41. 間谷遺跡
42. 草安切遺跡
43. 廟所古墳
44. 観音山古墳
45. 南尾横穴
46. 安歲主遺跡
47. 米坂遺跡
48. 米坂古墳群
49. 柴尾遺跡
50. G 2 3 遺跡
51. G 2 8 遺跡
52. G 2 2 遺跡
53. G 2 1 遺跡
54. J 2 6 古墳群
55. J 3 1 遺跡
56. J 2 1 古墳
57. 葉佐馬古墳
58. 藤谷A遺跡
59. J 3 2 遺跡
60. J 2 2 古墳群
61. J 2 7 古墳群
62. 八色谷遺跡
63. 才ノ神遺跡
64. 川津第1 1号墳
65. 川津第1 2号墳
66. 中尾古墳
67. J 5 8 遺跡
68. I 4 8 古墳
69. 納佐池遺跡
70. I 4 9 古墳
71. I 4 5 遺跡
72. 石野古墳群
73. 立花横穴
74. 谷田遺跡
75. 太田古墳群
76. 納佐遺跡
77. I 4 6 遺跡
78. 後田古墳
79. 前田古墳
80. 家の上古墳
81. 井上古墳
82. 一の谷古墳
83. 祖子分長池古墳
84. 祖子分胡麻畑遺跡
85. 柴遺跡
86. J 1 6 遺跡
87. 堤廻遺跡
88. 橋本遺跡
89. 荣II遺跡
90. 荣古墳群
91. 山崎古墳
92. 馬込山古墳群
93. 旧川津小学校裏古墳
94. 空山古墳群
95. 古屋敷古墳
96. 貝崎遺跡
97. J 4 3 古墳
98. 貝崎古墳群
99. 西川津貝崎遺跡
100. 持田川流域条里制遺跡
101. 小丸山古墳群
102. I 4 4 遺跡
103. 城の越横穴
104. 松の前古墳
105. I 4 3 遺跡
106. 鍛冶屋谷横穴
107. 穴の口横穴群
108. 洞泉寺裏古墳
109. J 5 3 古墳
110. I 4 0 遺跡
111. 垣の内古墳
112. I 3 9 遺跡
113. I 4 2 遺跡
114. I 3 7 遺跡
115. 金刀比利羅谷古墳
116. 国石古墳
117. 尾山横穴群
118. 大源古墳
119. I 4 1 遺跡
120. 和田上遺跡
121. 宮垣古墳群
122. 深町横穴
123. J 5 4 古墳
124. 深町古墳群
125. 福山古墳
126. 金崎古墳群
127. 上浜弓古墳群
128. 浜弓古墳群
129. 菅田ヶ丘古墳群
130. 宮田古墳群
131. 小丸山古墳
132. 菅田丘古墳
133. 薬師山古墳
134. 元井出遺跡
135. 赤崎横穴
136. 桜崎横穴
137. ひのさん山横穴群
138. 折廻古墳群
139. 松ヶ峠古墳
140. 岡田薬師古墳
141. 二反田古墓
142. 切通横穴
143. 茶町遺跡
144. 人參方跡
145. 白鹿谷遺跡
146. なつめ谷荒神古墳
147. コゴメダカ山遺跡
148. 長谷窓跡（推定地）
149. 長谷歳徳神古墳
150. 栗元古墳
151. 栗元横穴
152. 煙硝倉古墳
153. K 3 4 古墳

154. 赤山横穴群 155. 摩利支天山横穴 156. 法吉小学校裏山横穴群 157. 春日遺跡
158. 中代遺跡 159. 法吉遺跡 160. 石在経塚 161. 久米横穴群 162. 比津が崎横穴群
163. 唐梅古墳群 164. 久米古墳群 165. 山槻経塚群 166. 山槻古墳群
167. 吉岡兵之助宅前古墳 168. 下り松Ⅱ遺跡 169. 鶯谷遺跡 170. 下り松Ⅰ遺跡
171. 伝宇牟迦比姫命御陵古墳 172. 新宮古墳 173. 塚山古墳 174. 松崎金一郎所有山林古墳
175. 田中谷遺跡 176. 下り松遺跡 177. 下り松窯跡 178. 田中谷古墳群 179. 月廻横穴群
180. 久米遺跡 181. 久米第2横穴群 182. ひゃくだ横穴 183. 水酌崎横穴群
184. ゴルフ場内横穴群 185. ゴルフ場内古墳群 186. 小丸山古墳 187. K38古墳
188. K33古墳 189. とねり坂横穴群 190. K32古墳 191. 天倫寺前遺跡
192. 小池谷横穴群 193. 殿山横穴群 194. 東前横穴群 195. L36古墳 196. 大北古墳
197. 名尾荒神古墳 198. 名尾丘古墳 199. かいつき山古墳群 200. 井原古墳
201. 山玉神社跡 202. 山王古墳 203. 桜本古墳 204. 大門遺跡 205. 桜本古墳群
206. 名尾遺跡 207. 平遺跡 208. 法恩寺遺跡 209. 法恩寺瓦窯跡 210. 宮ノ下遺跡
211. 東生馬遺跡 212. 辺田横穴群 213. 生馬神社旧社地 214. 大岩遺跡 215. 郷戸横穴群
216. 布自枳見烽跡 217. 高専敷地内古墳群

第3章 第6次調査（橋本地区1）

第1節 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査は、現地表から約1.0m前後下までの現代盛土を重機によって排除した後、下位の遺物包含層を人力によって掘り下げた。包含層は、第1層から第4層までに大別される。

遺物の取り上げにあたっては、便宜的に、調査区の東西主軸ライン、東端ラインを基準として4m四方のグリッドで区分し（図7）、出土したグリッド名を記録した。グリッド名は、東西区画を北からA～B、南北区画を西から1～4とし、たとえば東西区画のA、南北区画の2に位置するグリッドは「A 2」グリッドと呼称した。

なお、グリッド名は、本次調査区内でのみ通有、完結するものであり、隣接する別次調査区のグリッド名とは無関係である。

遺物は、グリッド名に加え、出土地点とレベルを全て記録し、自然木についても、全て採取し、樹種鑑定を行った。

また、適時、研究員による指導を仰ぎ、調査方法、留意点を再検討しながら作業を進めた。

2 調査の経過

第6次調査は、調査面積、約64m²、調査期間、1997年3月19日から4月25日までを要した。

調査区は、第2次調査区の西側、第4次調査区の南側に隣接している（図6）。さらに、第4章で後述する第7次調査区が西側に連続して隣接する。

最上位の現代盛土を重機で排除した後、下位の遺物包含層、生活面について、層位的掘り下げと精査を行った。作業は、調査区内が狭小で、湧水の流出が非常に激しかったため、困難なものとなつた。

調査の結果、縄文期砂州（第3層）の上面において、自然流路を検出し、埋土から奈良時代の須恵器、杭を検出した。

排土置場確保等の諸都合で、3月26日～4月6日は現場作業を一時中断した。再開後、自然流路を完掘したところで、4月23日に全景写真を撮影した。

平面図作成の後、下位の第3層を掘り下げたが、遺物の出土はみなかった。調査区が狭小で、作業安全上、これ以下の掘り下げが困難であったことから、4月25日、全ての作業を終了した。

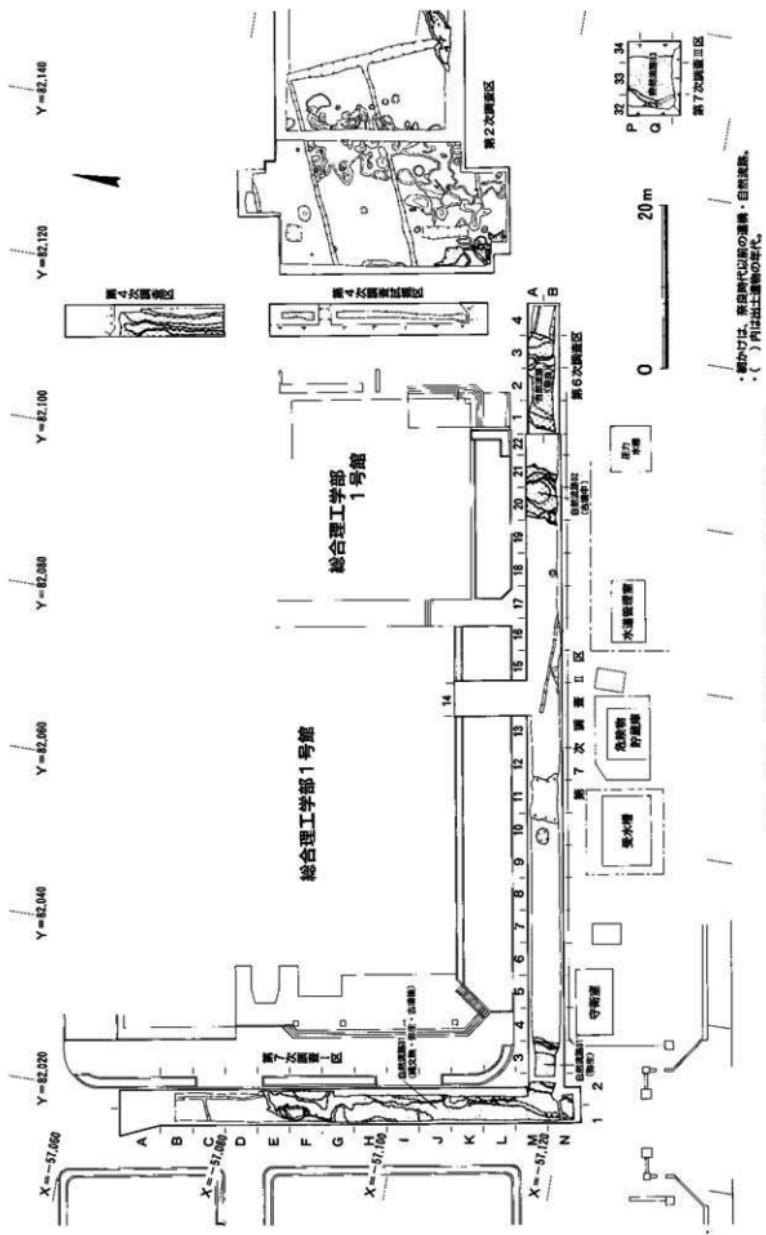


図6 第6・7次調査区第3層上面平面図(1/600)

第2節 基本層序（図7、図版1-2）

層序は、基本的に東隣の第2次調査区と同様である。層名は、第4章で後述する西隣の第7次調査区層名と統一・整合させているので、両調査区における同一層名は、ほぼ連続する同一層となる。

堆積層の概要

第1層 グライ化した近代の旧水田土壤で、しまった暗灰黄色泥土。主として近世末～近代の陶磁器を包含する。

第2層 本次調査区では堆積しない。第7次調査区のみ。

第3層 きわめて均質的な細粒で構成される細砂。宍道湖の沿岸流によって運搬堆積したものと推定される。土壤化の有無で、a～b層に細別される。

第3a層 黒褐色細砂による土壤化した層。上面の標高は+0.3m前後である。この上面から、南北方向の自然流路が検出されている。

第3b層 黄褐色細砂。下底は、約-0.1～0m。

第4層

第4a層 上部は、灰色細砂中に西側から東側に傾斜するラミナが挟在する。下部は、黒色細砂と暗褐色シルトの互層。西側から東側に傾斜して堆積する。

第3節 自然流路と遺物（図7、図版2）

第3層上面において、南北方向の自然流路とこの東肩から枝分かれする自然流路'を検出している。自然流路は、やや南西方向に進路をとり、幅約6m、深さ約1.5m、下底面の標高-1.2mで、断面は緩やかな「U」字状を呈する。

遺物は、自然流路の埋土中から奈良時代須恵器や杭を、埋土下底面から土師器を検出している。

土器（図8-1～2、図版3-1）

1は、須恵器横瓶。外面は、格子目状平行タタキ目とカキ目、内面は同心円状當て具痕とカキ目を残す。焼成は良好、胎土は長石を少し含む。

2は、須恵器杯。静止糸切り痕を残す底部から、内湾する体部をなし、丸くおさまる口縁端部にいたる。焼成は良好、胎土は長石を少し含む。

木製品（図9-1～3、図10-4～7、図版3-2、図版4）

いずれも埋土中からの出土で、1～3が板材、4～7が芯持ち円材による杭である。

1は、長さ26.2cm、最大幅5.0cm、厚さ2.0cmの板目板材。上端は折損、両側面、下端は削ってある。

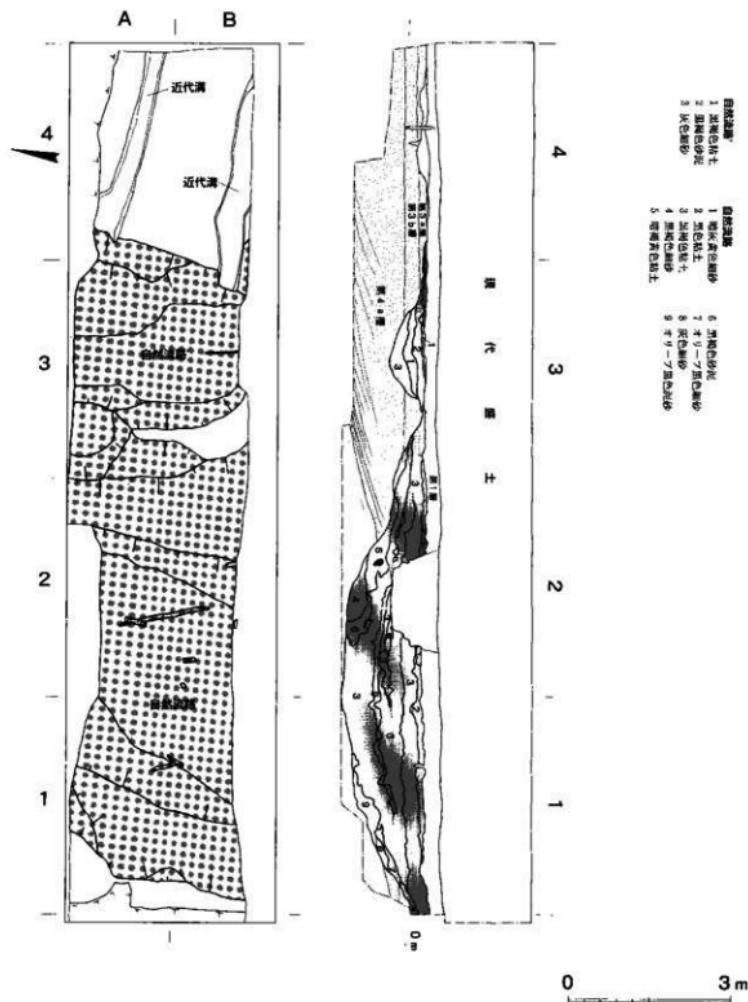


図7 第6次調査区第3層上面平面図・南壁断面図 (1/90)

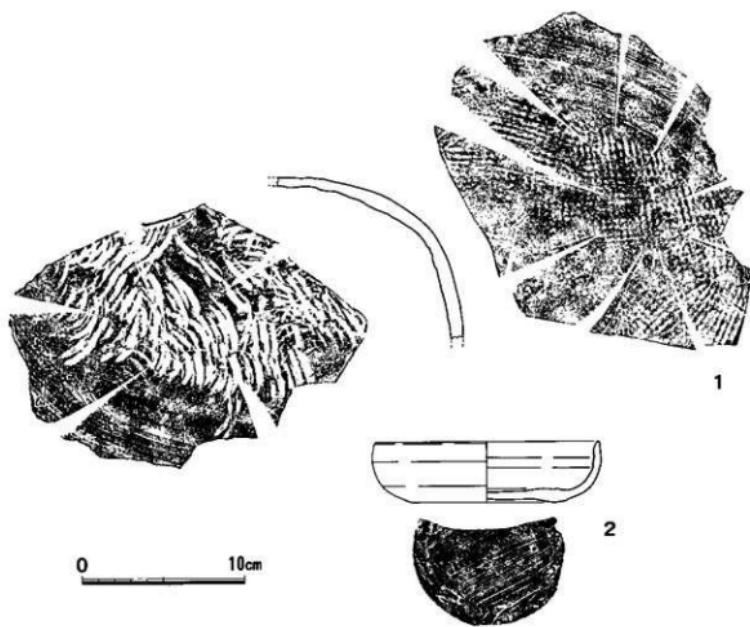


図8 第6次調査区自然流路埋土出土土器（1／3）

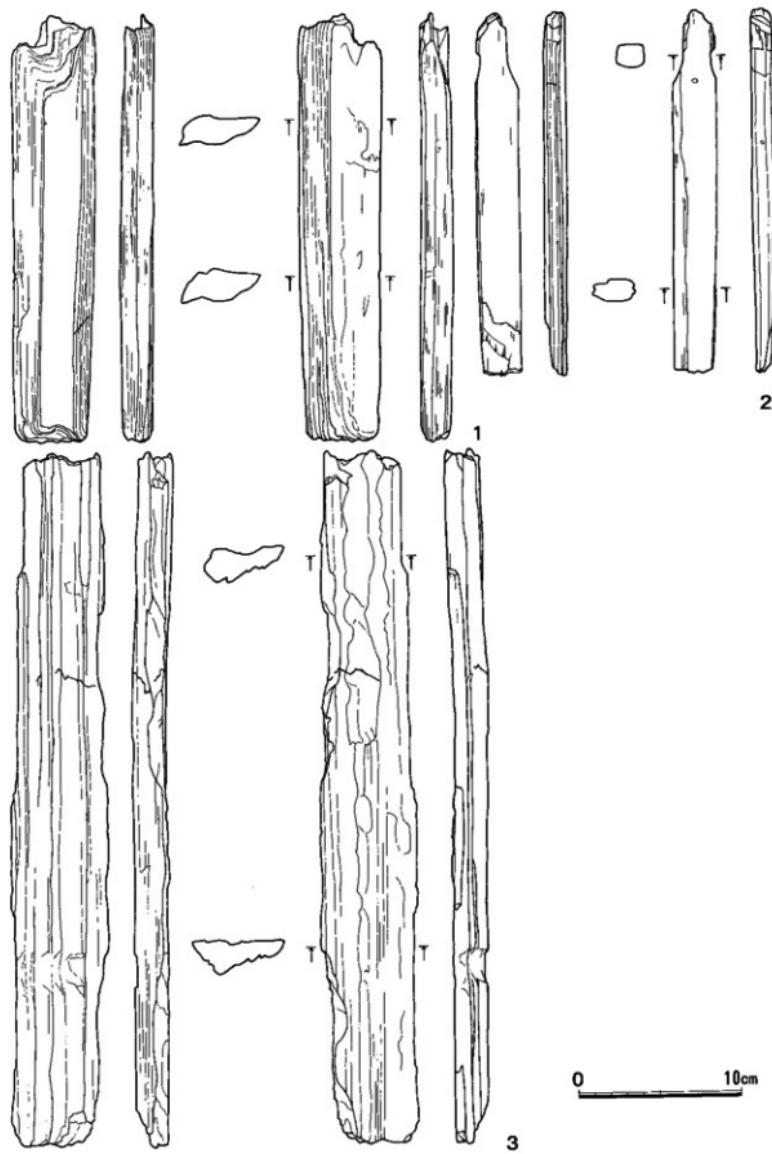


図9 第6次調査区自然流路埋土出土木製品（その1、1／3）

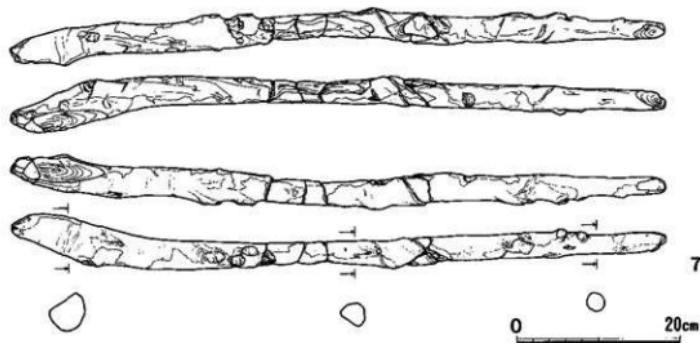
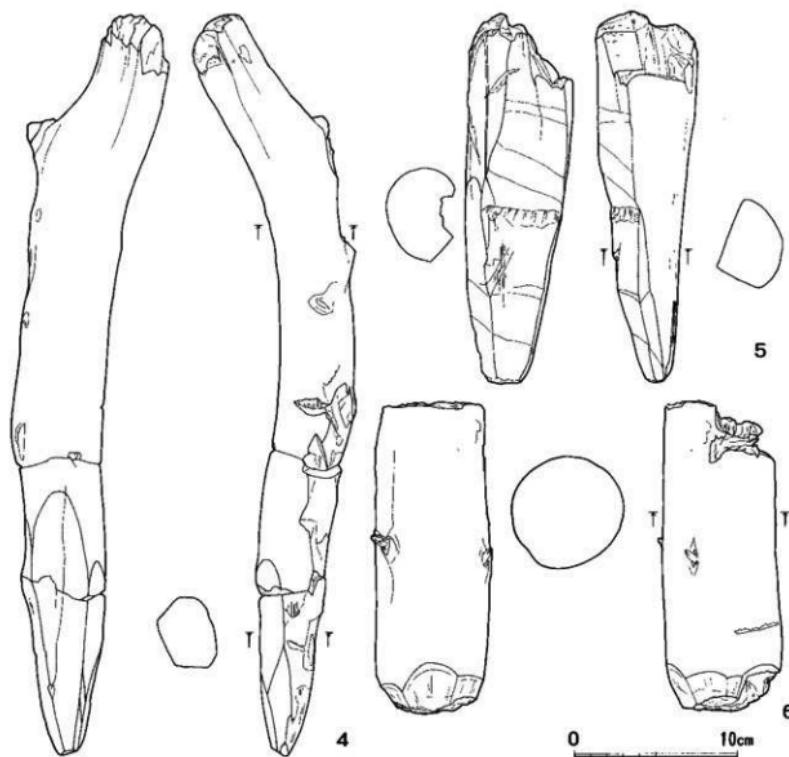


図10 第6次調査区自然流路埋土出土木製品（その2、1/3・1/6）

2は、長さ22.2cm、最大幅2.6cm、厚さ1.4cmの板目板材。上端付近の両側面に切れ込み、上端、両側面は削ってある。下端は折損。

3は、長さ42.6cm、最大幅6.0cm、厚さ2.0cmの板目板材。上端は折損、両側面、下端は削ってある。

4は、長さ45.5cm、最大径5.5cm。芯持ち円材の下端を切削して尖らせた杭。下端部は、切削面が4面あり、残りの約半周分は非加工である。上端は折損。

5は、長さ22.7cm、最大径6.5cm。芯持ち円材の下端を削って尖らせた杭。下端部は、切削面が3面で、工具が停止した痕跡が数カ所に認められる。残りの約半周分は非加工である。上端は折損。

6は、長さ19.0cm、最大径7.0cm。芯持ち円材の下端縁辺を切削した杭。先端は、尖らずに平坦面をなす。

7は、長さ81.0cm、最大径4.4cmを測る長細の芯持ち円材。派生する枝は切断し、両端を斜方向に切削、尖らせてある。周縁の樹皮は残してある。

第4節 小結

断面観察による第3層（砂州層）の斜行堆積状況から、この砂州が、西側から東側へ伸長して形成されたことが判明した。今後は、砂州のより詳しい形成過程やその範囲、これと近隣の朝酌川や原の前遺跡、タテチヨウ遺跡等、流域遺跡群との関係解明が必要であり、隣接調査における課題としたい。

第4章 第7次調査（橋本地区2）

第1節 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査は、現地表から約1.0m前後下までの現代盛土を重機によって排除した後、下位の遺物包含層を人力によって掘り下げた。包含層は、第1層から第4層までに大別され、層厚約4m以上である。

遺物の取り上げにあたっては、便宜的に、調査区I区の南北主軸ライン、調査区II区の東西主軸ラインを基準として4m四方のグリッドで区分し、出土したグリッド名を記録した（図6）。グリッド名は、東西区画を北からA～R、南北区画を西から1～34とし、たとえば東西区画のA、南北区画の2に位置するグリッドは「A 2」グリッドと呼称した。

なお、グリッド名は、本次調査区内でのみ通有、完結するものであり、隣接する別次調査区のグリッド名とは無関係である。

遺物は、グリッド名に加え、出土地点とレベルを全て記録し、自然木についても、全て採取し、樹種鑑定を行った。

また、適時、研究員による調査指導会を行い、調査方法、留意点を再検討しながら作業を進めた。

後述する古墳後期までに廃絶した自然流路02については、埋土の花粉分析を行い、当該期植生復元の資料を得た。

2 調査の経過

第7次調査区は、I～III区（図6）に分かれ、総面積約646m²、1997年9月19日から1998年1月27日まで実施した。

南北方向のI区（幅4.4m×長さ56.8m）と東西方向のII区（幅4.4m×長さ82m）は、狭長で「L」字状を呈し、II区が、第6次調査区の西側に連続して隣接する。III区（6m×6m）は、第2次調査区の南約15mに位置する。

調査は、I区、II区の順に、III区はII区に併行して実施した。

I区は、9月19日から、最上位現代盛土の重機掘削を開始し、下位の遺物包含層、遺構面について層位的な精査を実施した。第3層上面において、近代水田暗渠溝や弥生・古墳時代を中心とする自然流路01、自然流路01'を検出したため、完掘後、10月20・21日、北側から全景写真を撮影した。

自然流路01、01'は、概して北東から南西方向に進路をとる。自然流路01'下底面からは弥生上器片が出土した。自然流路01'埋積後、これに重複して流れた自然流路01では、埋土下層、下底面

から縄文土器、弥生土器、古墳後期の須恵器、土師器、木製品等が出土している。

10月27日、研究員による現地指導会を実施した後、さらに下位層（第4層）の掘り下げを進めたが、特筆される遺物の出土はみなかった。第4層を標高約-1.5mまで掘り下げたところで、遺物出土がないことや作業安全を考慮し、11月10日、調査を終了した。

II区は、11月6日から、調査を開始した。第3層上面で、弥生・古墳時代の自然流路01'、自然流路02、近代水田の暗渠溝、近代南北大溝、旧制松江高校時代の建築物基礎杭等を検出している。

自然流路02は、調査区東隅で検出しており、概して北東から南西方向に進む。下底面からは5世紀代の土師器、杭等が出土している。

12月12日、研究員による現地指導会を実施した後、下位の第4層を掘り下げた結果、第4層（海成層）中から縄文中期の船元IV式土器片が1点出土した。標高約-2.5mまで掘り下げたところで、1998年1月27日、調査を終了した。

III区は、1997年12月2日から調査を開始した結果、第3層上面で、北東から南西方向へ進む自然流路03を検出した。完掘後、12月12日、調査を終了した。

第2節 基本層序（図11・12）

基本層序は、第6次調査区とほぼ同一である（第3章第2節参照）。

第1層 グライ化した近代の旧水田土壤で、しまった暗灰黄色泥土。主として近世末～近代の陶磁器を包含する。

第2層 黒色粘土層。調査区内では、I区自然流路01埋土上位の北半部のみに堆積するが、第2次調査区で検出された第2層と同一層である可能性がある。層厚約20cm。奈良時代須恵器片が出土している。

第2層下位砂層 淘汰の悪い河川性の砂礫層。主として、I区自然流路01・01' 埋土上位やII区自然流路02埋土上位に30～40cmの厚さで堆積する。炭化材の小片や山本Ⅲ期須恵器杯が出土しており、6世紀後半頃の堆積と推定。III区からも、10～20cmの厚さで検出されており、同一層の可能性がある。

第3層 非常に均質な細粒で構成される細砂。宍道湖の沿岸流によって運搬堆積したものと推定される。土壤化の有無で、a～b層に細別される。

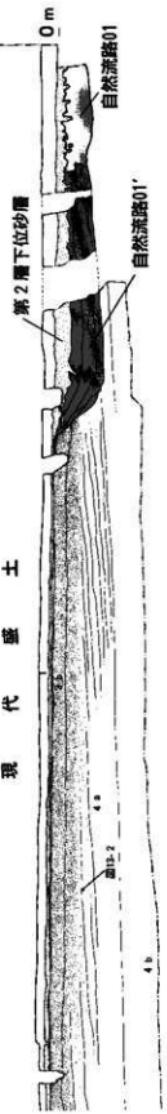
第3a層 黒褐色細砂。土壤化した層。上面の標高は+0.3m前後である。この上面から、南北方向の自然流路01・01' が検出されている。

第3b層 黄褐色細砂。下底は、約-0.1～0m。

第4層 海成層。便宜的に、ラミナの有無によってa～b層に細別した。

第4a層 上部は、灰色細砂。西側から東側に傾斜するラミナが挟在する。下部は、黒色細砂

東 7 6 5 4 3 2 1 西



東 13 12 11 10 9 8 西

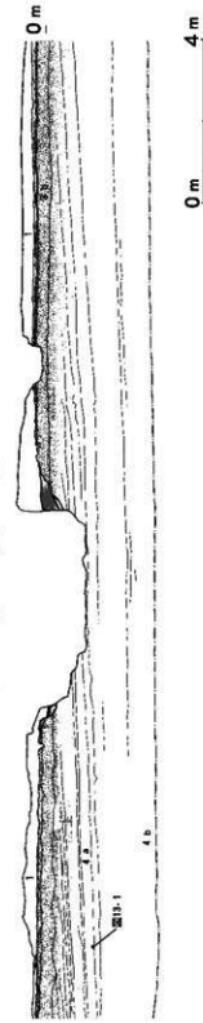


图11 第7次調查II区 南壁断面圖 (1/120)

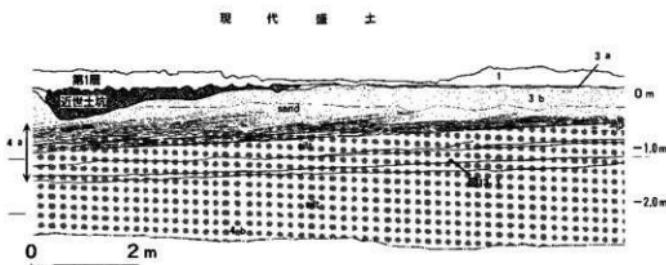


図12 第7次調査II区南壁断面拡大図（1／90）

と暗褐色シルトの互層。下部程、漸移的に暗褐色シルトが増し、黒色細砂がラミナ状に挟在する。一部で、バイオターベーションが観察出来る。

第4 b層 暗褐色シルト層でラミナは挟在しない。

I区北端部で得られたボーリングコアからは、標高-3.5m付近よりパックされたアカホヤ火山灰（K-A h）が明瞭に検出されている。第4層は海成層であり、アカホヤ火山灰降灰時の繩文前期初頭には、水底が-3.5m付近にあったことが想定される。ここから南東約110mに位置する第2次調査区ボーリングコア（BP1）からも標高-3.5m付近でアカホヤ火山灰ガラスを検出しており¹¹⁾、当該期調査区内の水底がほぼ平坦であったことが想定される。

遺物は、標高-0.58mから磨石（図13-2）、標高-1.06mから繩文中期船元IV式土器片（図13-1）、標高-1.8～-2.0mを中心に現地性のシジミ死滅貝が出土している。

注

(1) 中村唯史「第5章 地質学的調査による成果」『島根大学構内遺跡発掘調査概報II（諸田地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1996年

第3節 自然流路・遺物

遺物は、調査区・層位・遺構別に図示、説明する。木製品は、用途が明確でないものも加工痕があれば全て図示した。

1 I・II区

(1) 第4層の遺物 (図13-1～2、図版10-1)

第4層は、海成堆積層である。本層からは、数点の遺物、自然礫が出土しており、いずれも人為的に遭棄され、埋没したものと想定している。

1は、縄文中期船元IV式に比定される土器口縁部。キャリバー形口縁部で、口縁端部は肥厚せず、丸くおさまる。外面は、Rの深浅縄文。内面はナデ調整である。胎土は石英、長石を含み、焼成は良好、色調は黒褐色である。重量20gを測る。標高-1.06mから出土。

2は、平面やや橢円形の円礫で、磨石と目される。長軸11.5cm、短軸10.3cm、重量1.1kgを測る。標高-0.58mから出土。

(2) 第3層上面の自然流路・遺物 (図14～16)

a 自然流路01 (図14～16)

I区E・1～2グリッドから南端N・1～2グリッドにかけての範囲で検出。最深部で、深さ約1.3m、下底面の標高は約-0.9m。埋積した自然流路01'を切って一部重複しながら、概ね北東から南西方向へ進路をとる。北半E～Jグリッドは、下底部が、水流の營力による土坑状の凹凸をなす。

埋土は、自然堆積で、上層、下層、最下層に大別される。上層が黒褐色シルト、下層が黒褐色シルト、最下層は黒褐色泥砂ないし砂泥である。

遺物は、古墳後期のものを中心とし、主としてE～F・1～2グリッドで最下層ないし下底面から出土している。

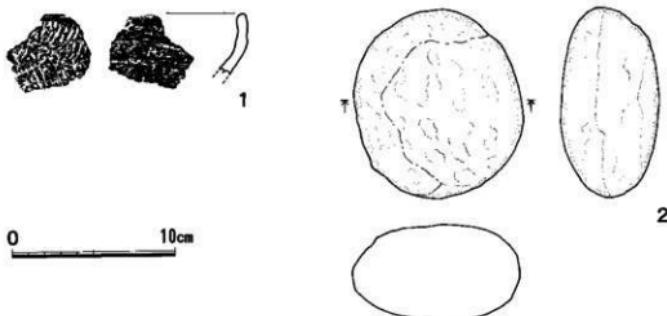


図13 第7次調査II区 第4層出土遺物 (1/3)

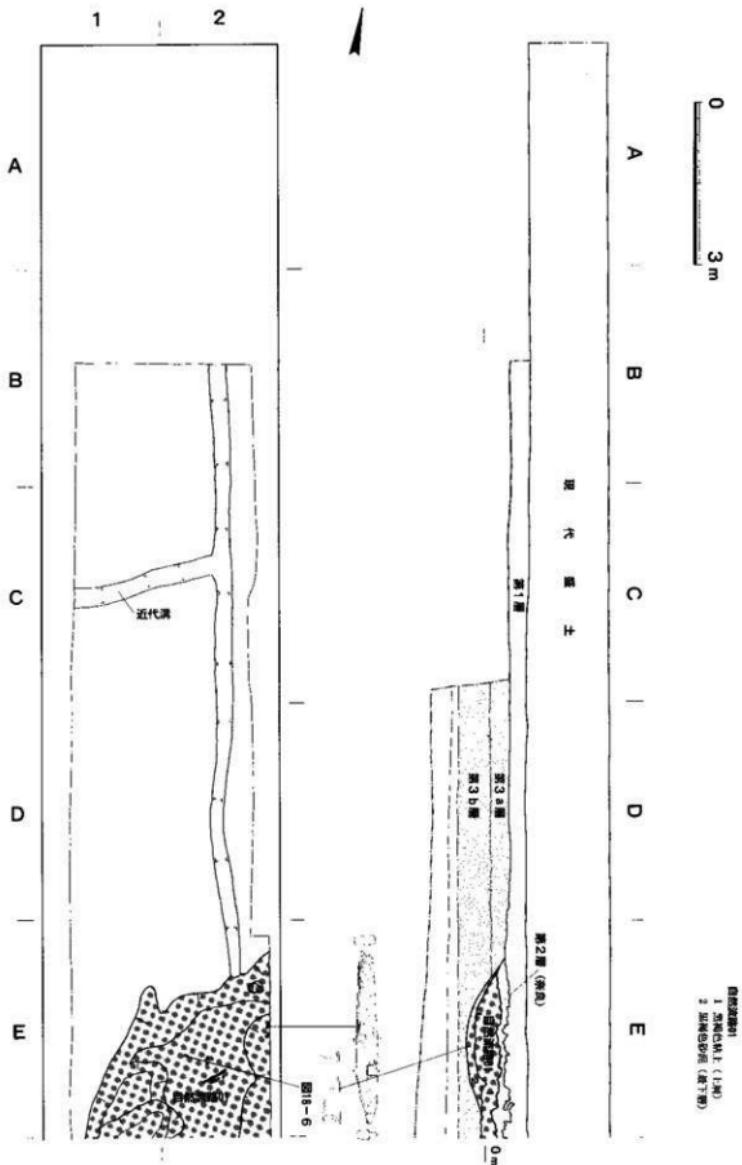


図14 第7次調査I区 第3層上面平面図・東壁断面図（その1、1/90）

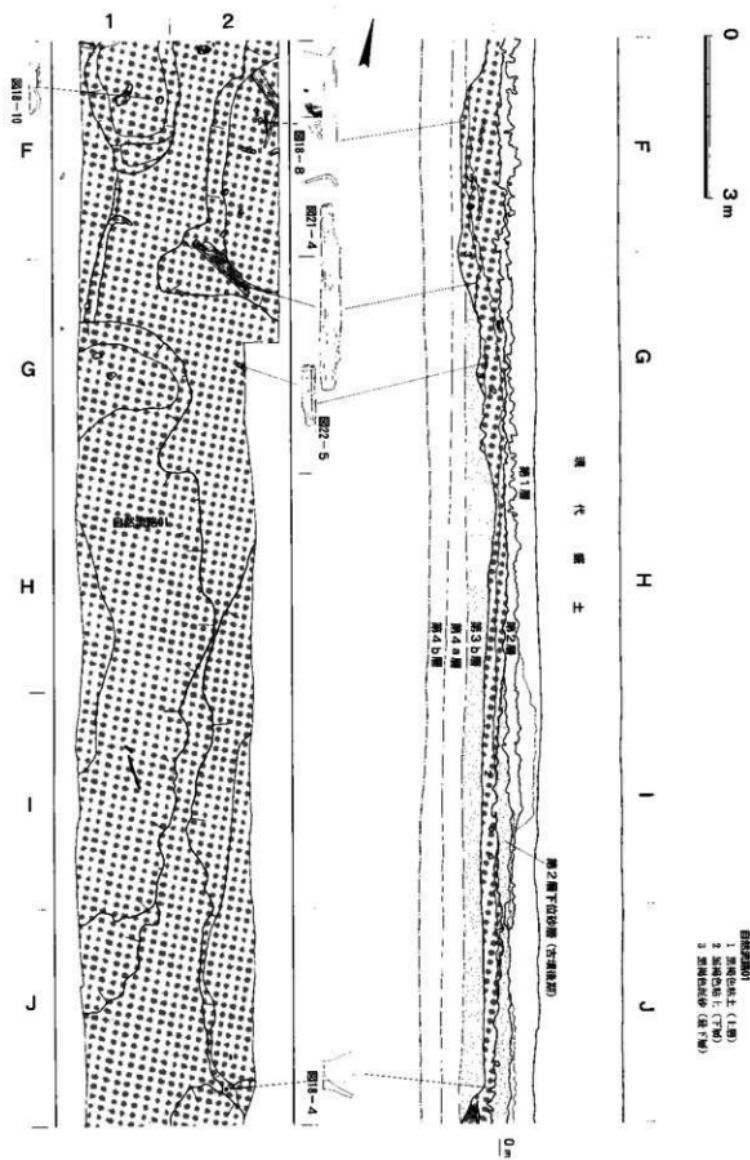


図15 第7次調査I区 第3層上面平面図・東壁断面図（その2、1/90）

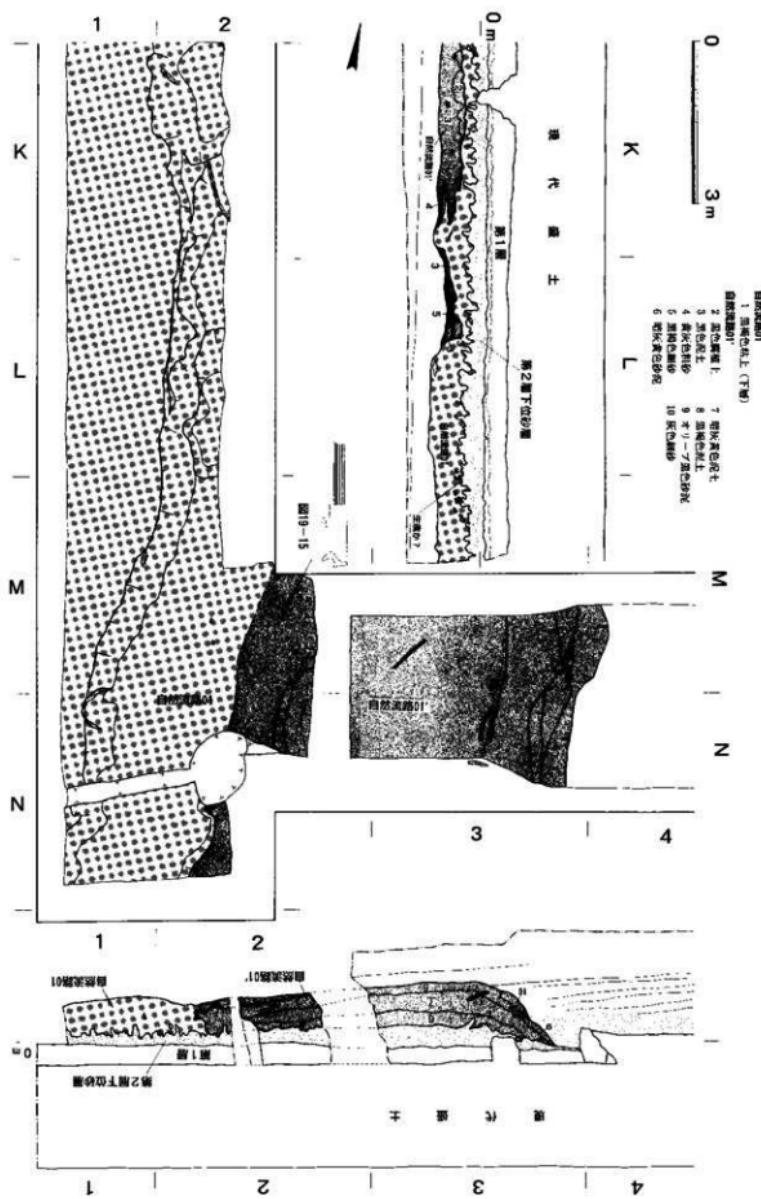


図16 第7次調査 I・II区 第3層上面平面図・東壁断面図 (その3. 1/90)

E 2 グリッド、東矢板壁際の流路肩部付近からは、建築部材と目される角材の転用杭（図20-1）が、垂直に突き刺された状態で検出されている（図17、図版6-1）。断面観察によると、最下層堆積後に打ち込まれたとみられ、周縁で伴出した土器から古墳時代後期頃に比定される。周囲からは、人為的に遺棄されたとみられる板材、木製容器、土器片、人頭大礫（大半が玄武岩、一部に泥岩）等も出土しており、関連がありそうである。単独の杭であるため用途、機能については不明だが、板に、調査区外に対応する別の杭が存在すれば、橋、棧橋等、構造物の一部をなしていた可能性が考えられよう。

流路埋土上位には、第2層下位砂層（河川性砂礫層）と第2層が堆積する。各々、古墳後期、奈良時代の堆積と比定されるので、当該期には本流路は埋没していたとみられる。

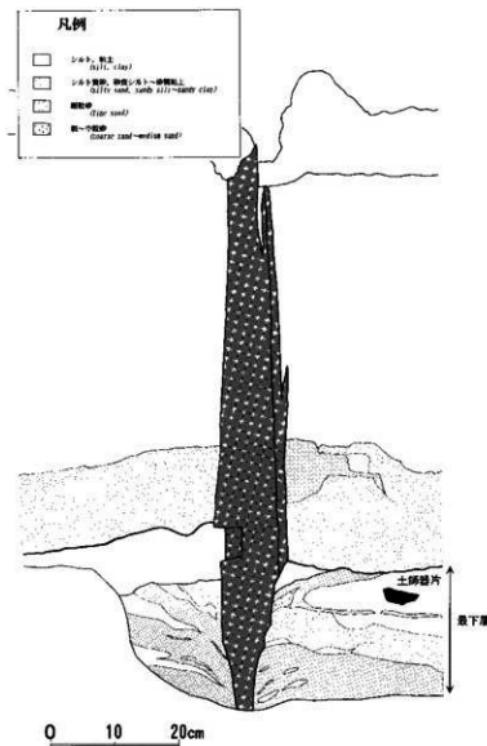


図17 自然流路01内杭検出状態立面図（1／250）

土器（図18-3～10・図19-11～12、図版10-2・4・図版11）

3は、縄文土器口縁部。II縁端部は平坦。外面は斜方向のケズリ、内面はナデ調整。胎土は長石、黒色微砂粒を含み、焼成は良好、色調は黄灰色である。晩期の粗製土器。

4は、弥生土器底部。内面に指頭圧痕を残す。胎土に径1～3mmの長石が多く混和する。色調は暗灰黄色。形態、胎土からみて前期頃に比定出来る。

5～8は、古墳後期の土師器甕口縁部。いずれも、緩やかに「く」の字状に屈曲する口縁部で、胴部外面は縦位のハケ目、内面はケズリ。

9は、須恵器甕。体部外面は平行タタキ目に一部、横方向のカキ目、内面は同心円状の当て具痕を残す。焼成は良好、胎土は精良。

10は、須恵器杯蓋。胎土は黒色砂粒を多く含む。

11、12は、須恵器甕の体部片。外面は平行タタキ目、内面は同心円状の当て具痕を残す。

木製品（図20-1～2・図21-3～4・図22-5～6・図23-7～9、図版12・図版13-1）

1～9とも、自然流路01を埋積した最下層から出土している。伴出遺物からみて、概ね古墳時代後期を中心とした時期の所産であろう。

1は、E2グリッド、東壁際の流路肩部付近において垂直に打ち込まれた状態で検出されている。長さ85.4cm、最大幅10.2cm、厚さ4.8cmを測る角材の下端を切削して尖らせた杭。下端は角材両側面に2面、表裏面に2面の銳利な切削面があり、工具が断続的に停止した痕跡がある。下半部側面に渡り腮仕口（わたりあごしぐち）があることから、建築部材を転用したものとみられる。上端は折損。

2は、長さ92.2cm、最大幅17.0cm、厚さ3.8cmの板目板材。上端は折損、下端は切断。平面左下に割り出した瘤状の突起がある。

3は、長さ100.6cm、最大径5.0cmを測る長細な自然木の下端を切削して尖らせた粗製の杭。下端切削面は明瞭でなく、枝の処理も概して粗雑である。上端は折損。

4は、長さ92.2cm、幅10.2cm、厚さ2.4cmの柾目板材。上端は折損、下端は切断。

1区
第2層

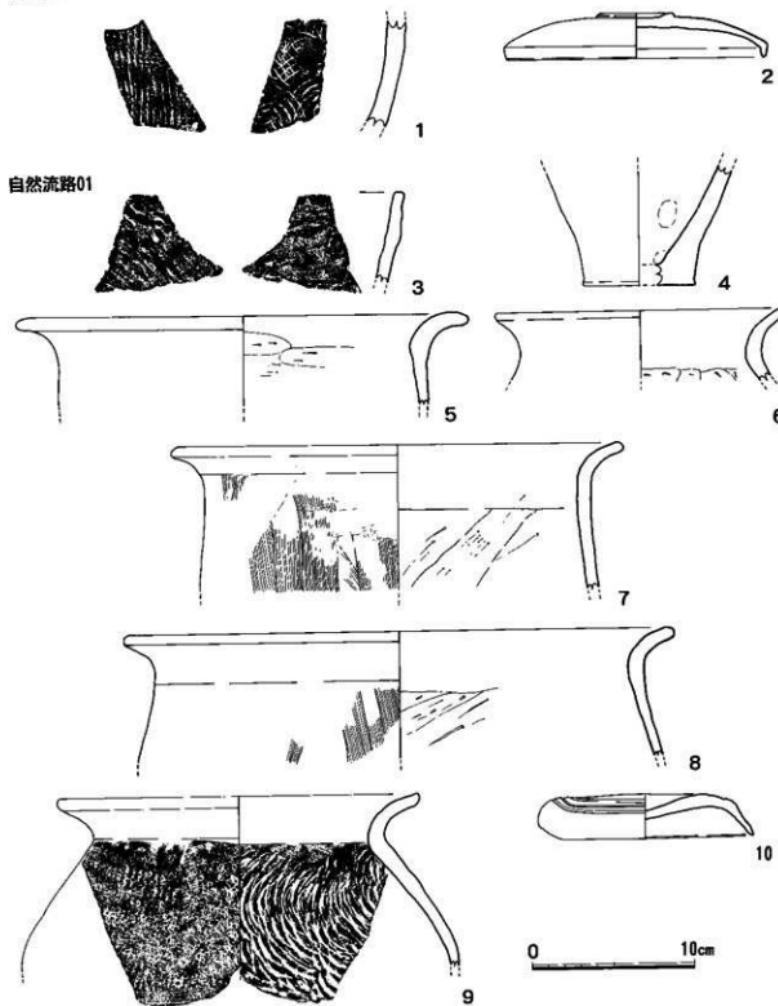
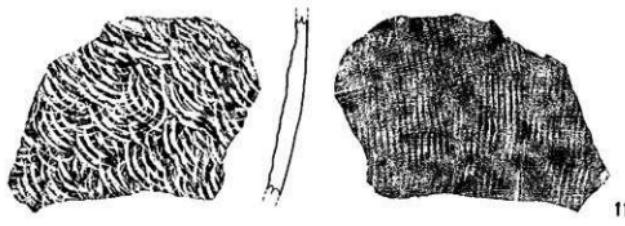
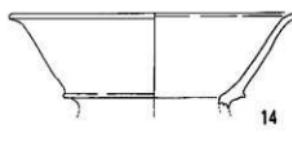
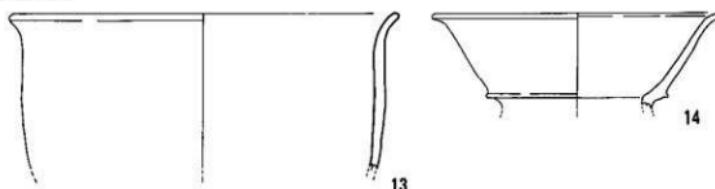


図18 第7次調査1区 第2層・自然流路01 出土土器 (1/3)

I区
自然流路01

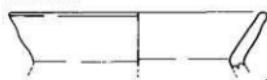


自然流路01'



II区

自然流路02

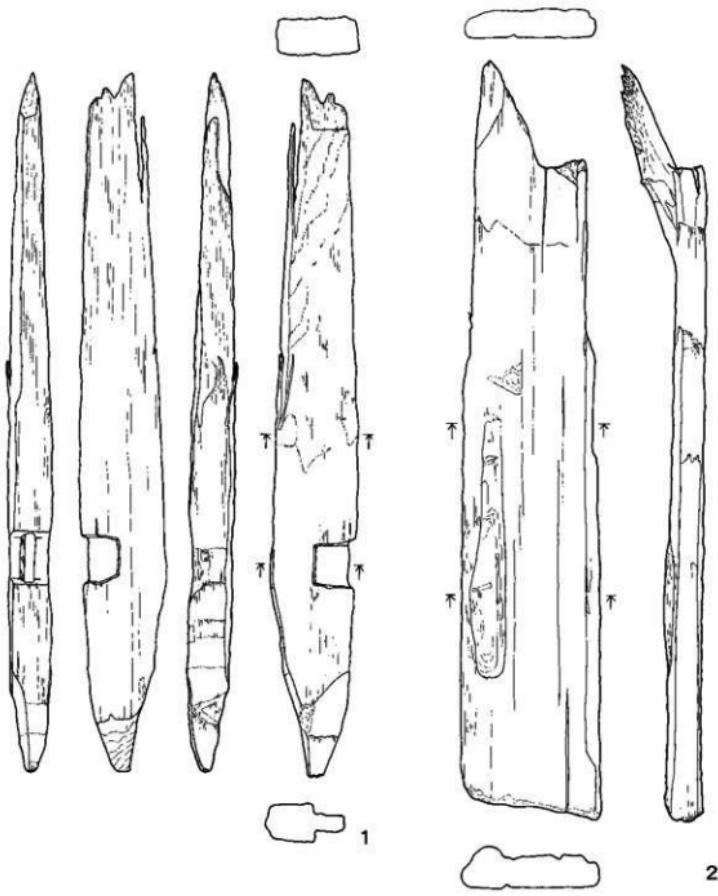


第2層下位砂層



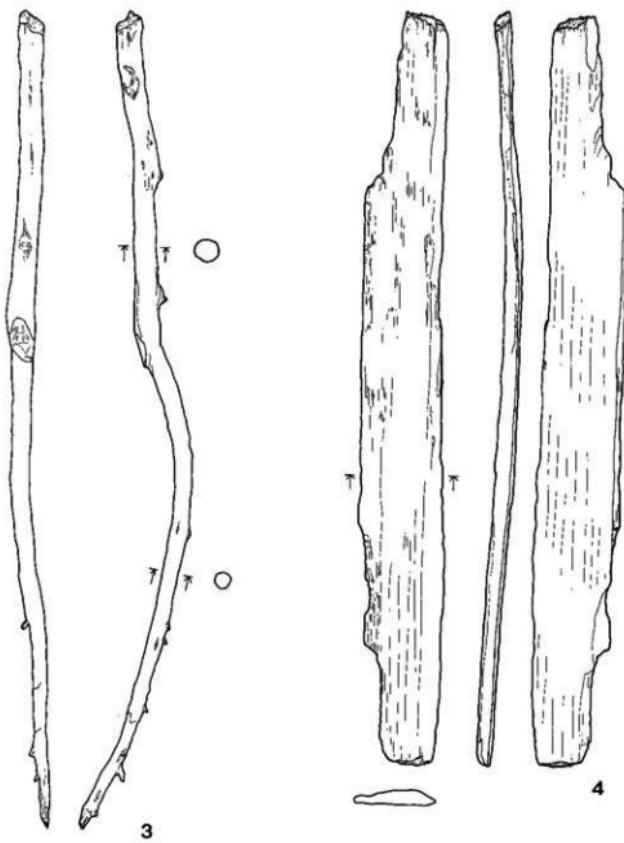
0 10cm

図19 第7次調査 I区 自然流路01・01'・II区 自然流路02・第2層下位砂層出土土器 (1/3)



0 20cm

図20 第7次調査1区 自然流路01埋土出土木製品（その1、1／6）



0 20cm

図21 第7次調査I区 自然流路01埋土出土木製品（その2、1／6）

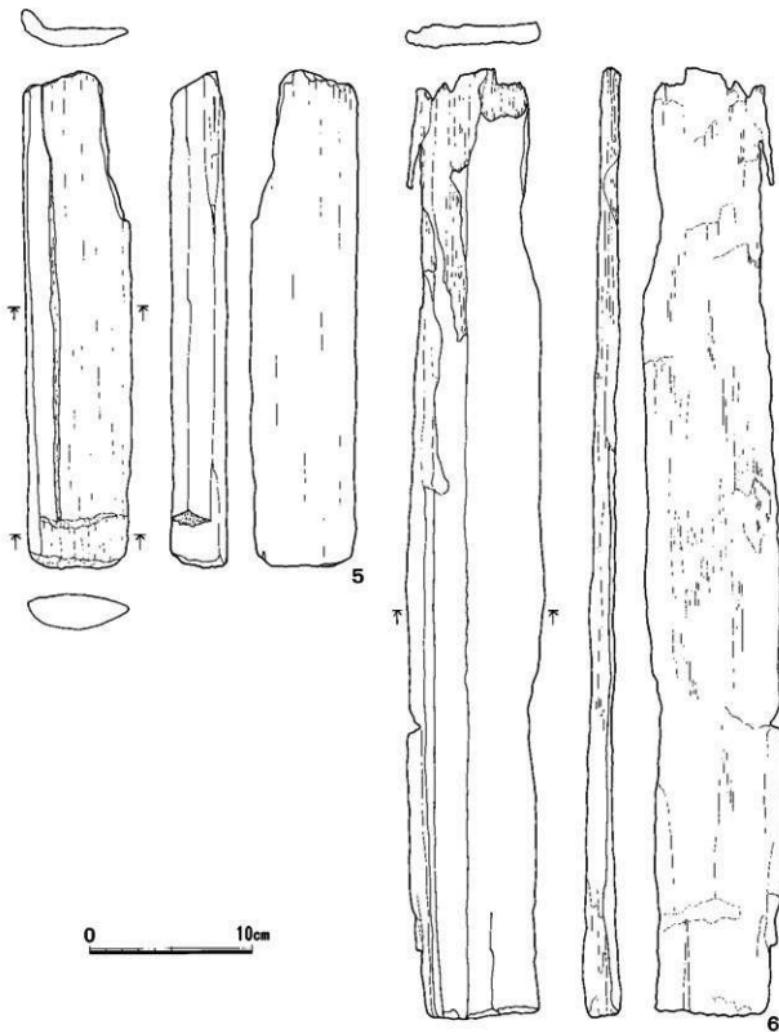


図22 第7次調査I区 自然流路01埋土出土木製品（その3、1／3）

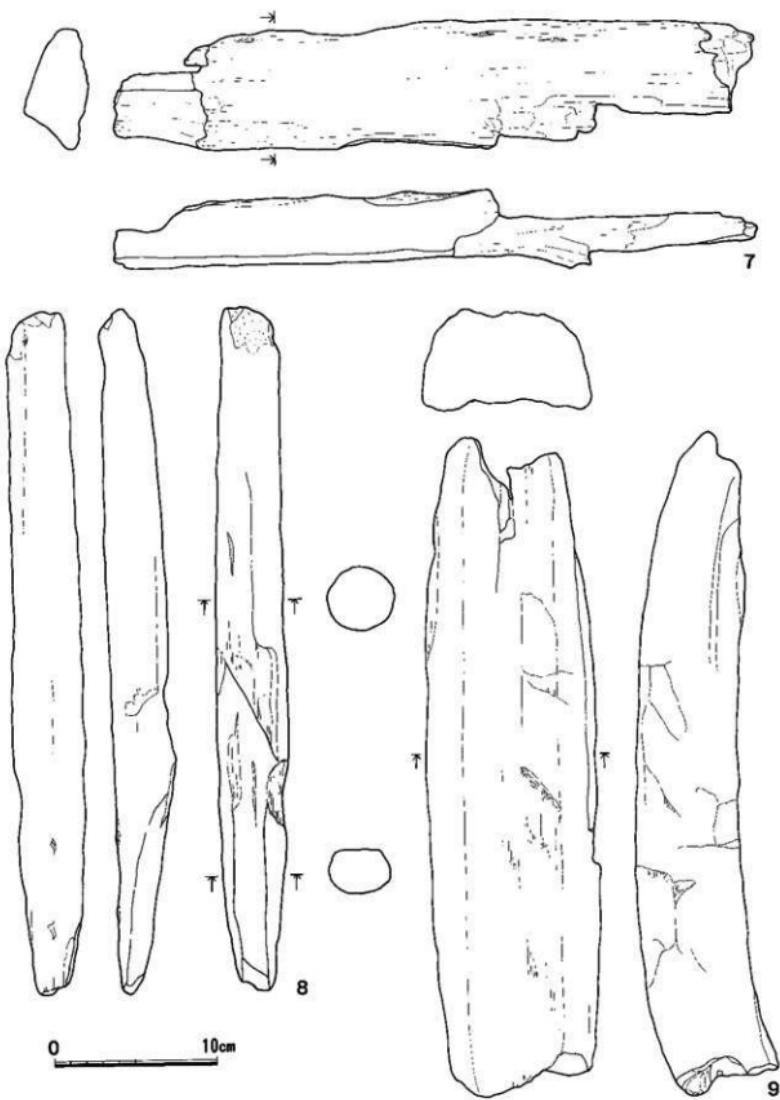


図23 第7次調査I区 自然流路01埋土出土木製品（その4、1／3）

5は、長さ30.3cm、最大幅6.5cmの容器。板目板材を横断面レンズ状に成形し、側辺と小口を残し、削り貫いている。上端は折損。類似した木製容器は近隣のタテヨウ遺跡でも出土している。

6は、長さ58.3cm、最大幅8.6cm、厚さ1.2cmの板目板材。上端は折損、下端は切断。

7は、長さ39.7cm、最大幅7.8cmの角材。両端、片側側面の破損が激しい。

8は、長さ42.0cm、最大径4.3cmの芯持ち円材下端を切削して尖らせた杭。下端は3ヶ所に鋭利な切削面があり、残りの約半周分は非加工である。

9は、長さ40.5cm、最大幅10.4cmの角材。円材を半載し整形してある。一部に虫食い穴が認められる。

b 自然流路01'（図16、図版7-2）

M～N・2～3グリッドで検出。深さ約1.2m、下底面は標高-0.8～-1.1mを測る。

埋土は、自然堆積で、黒褐色泥土、暗灰黄色泥土等からなる。埋積後、自然流路01に切られているので、古墳後期までには廃絶していた様である。

遺物は、下底面で弥生前期と後期、後期終末ないし古墳前期初頭の土器が出土している。この他、下底面で杭、人頭大碟が、埋土内で杭が出土している。

土器（図19-13～15、図版11）

13は、如意状口縁をもつ弥生前期の甕。口縁部は短く緩く外反、胎土に径1～3mmの長石を多く混和する。焼成は良好、色調は黄灰色。

14は、弥生後期終末ないし古墳前期初頭の鼓型器台。胎土は微砂粒を多く含む。焼成は良好、色調は灰黄色。

15は、弥生後期の甕。複合口縁で、口縁帶には、9条の擬凹線がめぐり、下端が下方にやや延びる。口縁端部は面取りされ、平坦である。頸部内面は、ヘラケズリ。胎土は微砂粒をやや含む。焼成は良好、色調は黒褐色。弥生後期中葉「九重式」とみられる。

木製品（図24-10～15、図版13-2）

10～15とも自然流路01' 埋土内からの出土。下底面からの出土はみられない。古墳後期までの所産とみられる。

10は、長さ58.4cm、最大径6.3cmの芯持ち円材端を切削し尖らせた杭。下端に4面の切削面、上端に3面の切削面がある。表面に虫食い痕がある。

11は、長さ41.9cm、最大幅3.4cmの板材。上下端とも折損する。

12は、長さ28.0cm、最大幅1.5cmの板材。上端は折損、下端は切削、ヘラ状に尖らせてあり、一部に焦痕を留める。

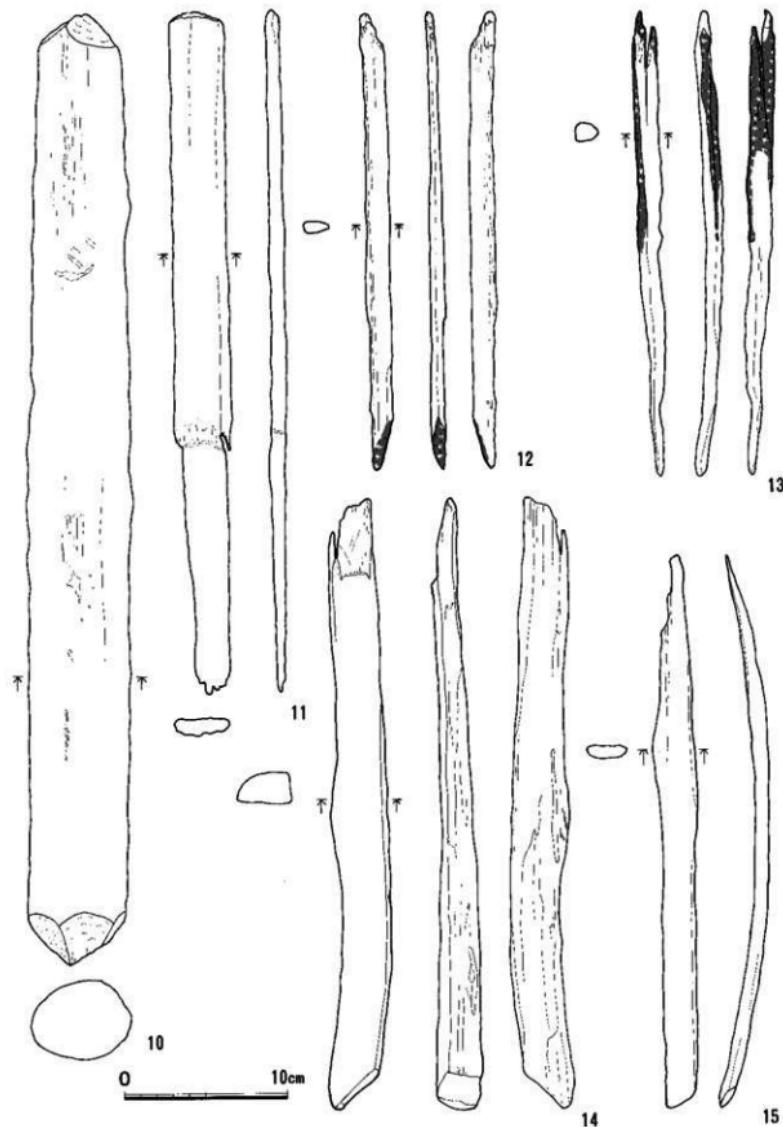


図24 第7次調査I区 自然流路01埋土出土木製品 (1/3)

- 13は、長さ28.5cm、最大幅1.5cmの棒材。一部に焦痕を残す。木器加工時の廃材か。
- 14は、長さ37.6cm、最大幅3.6cmの角材。上端は折損、下端は斜方向に切削してある。
- 15は、長さ34.0cm、最大幅2.5cmの板材。上端は折損、下端は斜方向に切削面を残す。

c 自然流路02（図25、図版8-1）

II区東端のM～N・20～21グリッドで検出。幅約6.4m、深さ約1.3mを測る。やや南西方向へ進路をとる。

埋土は、自然堆積で、黒褐色、オリーブ黒色等の泥土、砂泥からなる。埋土層位間で不整合が認められるので、埋積過程に隙間があった様である。上位の第2層下位砂層（河川性砂礫層）中からは、古墳後期須恵器（図19-18）が出土しており、当該期には本流路も完全に埋没したとみられる。

遺物は、概ね5世紀代の上師器片、杭、人頭大礫（玄武岩等）が下底面で、杭、焦痕のある材等が埋土中から出土している。

自然流路02内杭群（図25、図版8-2）

M20グリッドで検出。一定範囲に、突き刺った杭6本と横転した杭、材が集積する。杭は、自然流路02埋土堆積途中か堆積後に打ち込まれたとみられ、いずれも径4～6cm程の細いもので構成される。杭の下端は標高約-1.9mに達する。上端は折損している。

横転した杭、材は、第2層下位砂層（河川性砂礫層）下部中から検出されており、概して長軸を南側の定方向へ向けていることから、第2層下位砂層堆積時の水流営力によるものとみられる。

杭群の用途、機能は不明である。

上器（図19-16～17）

16は、「く」の字状口縁の土師器甕口縁部。やや内湾気味に外方に立上り、口縁端部は丸く収まる。胎土は白色砂粒を含む。焼成は良好、色調は黒褐色。

17は、高杯の杯部。内湾気味に立上り、口縁端部は丸く収まる。胎土は白色砂粒を少し含む。焼成は良好、色調は、外面が灰黄色、内面が黒褐色。

木製品（図26-16～21、図27-22～24）

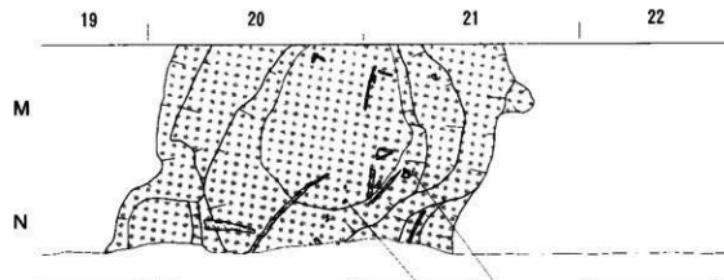
16～19が埋土内、20～21が下底面からの出土。22～24は、上述した埋土に突き刺された杭群。

16は、長さ21.5cm、最大幅3.0cmの角材。焦痕を多く残す。

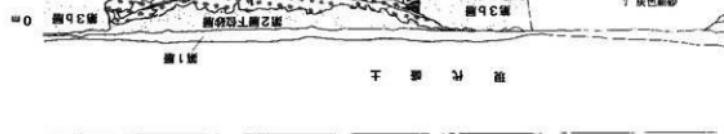
17は、長さ約25.8cm、最大径4.2cmの角材。焦痕を多く残す。

18は、長さ22.2cm、最大径2.8cmを測る、平面「Y」字状の芯持ち材下端を切削したもの。杭加工過程の廃材か。

自然路02



- 自然路02
1. 赤褐色砂岩
 2. オリーブ褐色砂泥
 3. 黄褐色土
 4. 淡褐色泥上
 5. オリーブ褐色泥上
 6. オリーブ褐色泥砂
 7. 灰色泥砂



杭群
(自然路02中)

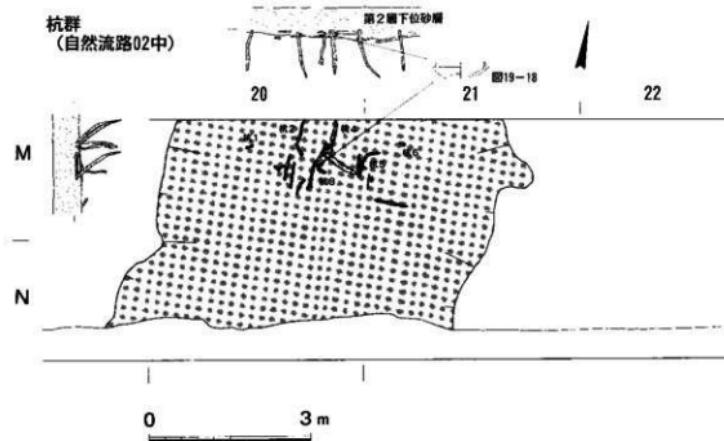


図25 第7次調査II区 第3層上面平面図 (1/90)

19は、長さ63.0cm、最大径5.0cmの芯持ち円材下端を切削し尖らせた杭。下端切削面は1面のみ。上端は折損。表面に虫食い痕がある。

20は、長さ66.2cm、最大径5.0cmの芯持ち円材下端を切削し尖らせた杭。下端切削面は1面で、工具が断続的に静止した痕跡がある。上端にも1面の切削面があり、焦痕を留める。

21は、長さ89.0cm、最大幅5.8cmの角材による杭。横断面は扇状をなす。下端は焦がして尖らせてある。

22（杭群－杭6）は、長さ76.4cm、最大径5.8cmの芯持ち円材下端を切削し尖らせた杭。下端切削面は4面で、上端は折損する。派生する枝は切断してある。

23（杭群－杭2）は、長さ94.0cm、最大径4.4cmの芯持ち円材下端を切削し尖らせた杭。下端切削面は3面で、上端は折損する。派生する枝は切断してある。

24（杭群－杭5）は、長さ109.2cm、最大径5.2cmの芯持ち円材下端を切削し尖らせた杭。下端切削面は6面で角錐状をなし、上端は折損する。派生する枝は切断してある。

（3）第2層下位砂層の遺物（図19-18、図版10-3）

第2層下位砂層は河川性砂礫層であるが、遺物は、18の1点と炭化した材片が出土しているにすぎない。

18は、須恵器蓋杯の杯。M20グリッド、自然流路02の杭群上位で出土している。全体に歪みがあり、たちあがりは短く内傾、口縁部は尖り気味に丸く収まる。胎土は精良、焼成は良好。古墳後期の山本編年Ⅲ期。

（4）第2層の遺物（図18-1～2、図版10-4）

1は、須恵器壺の体部片。外面は平行タタキ目、内面は同心円状の当て具痕を残す。焼成は良好、胎土は黒色砂粒を含む。

2は、輪状つまみが付く低平な須恵器蓋。

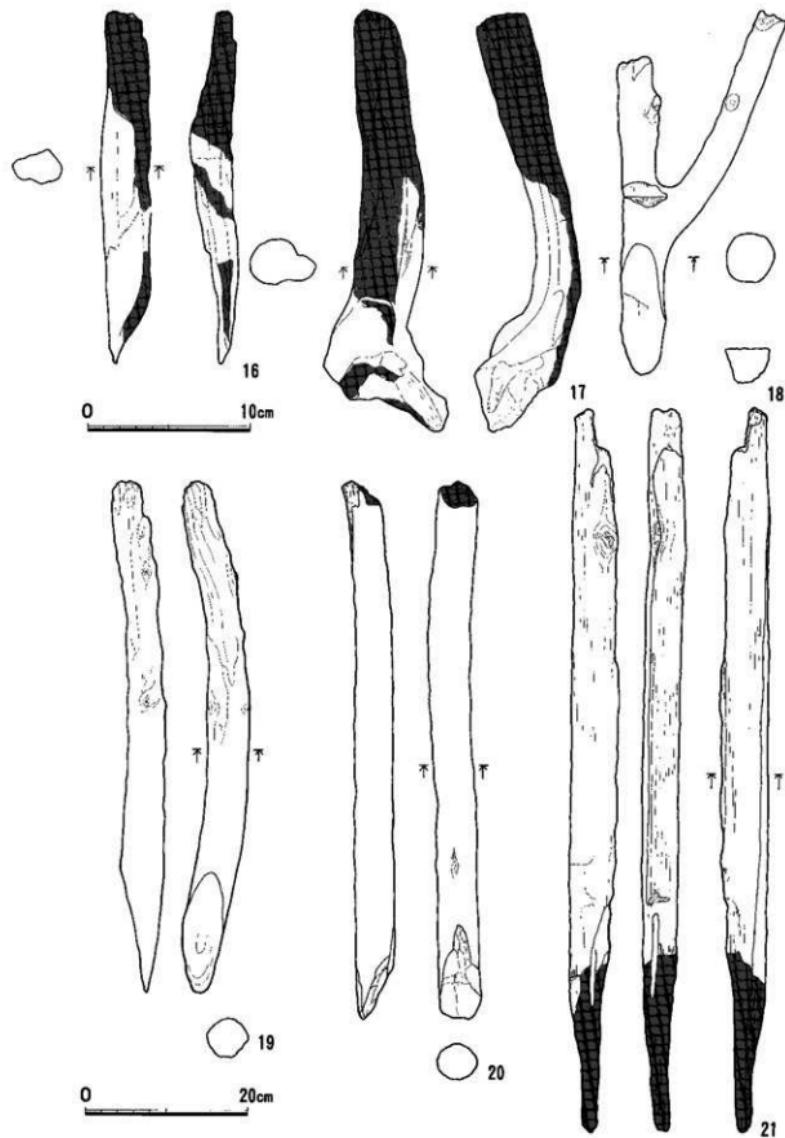


図26 第7次調査II区 自然路02出土木製品 (1/3・1/6)

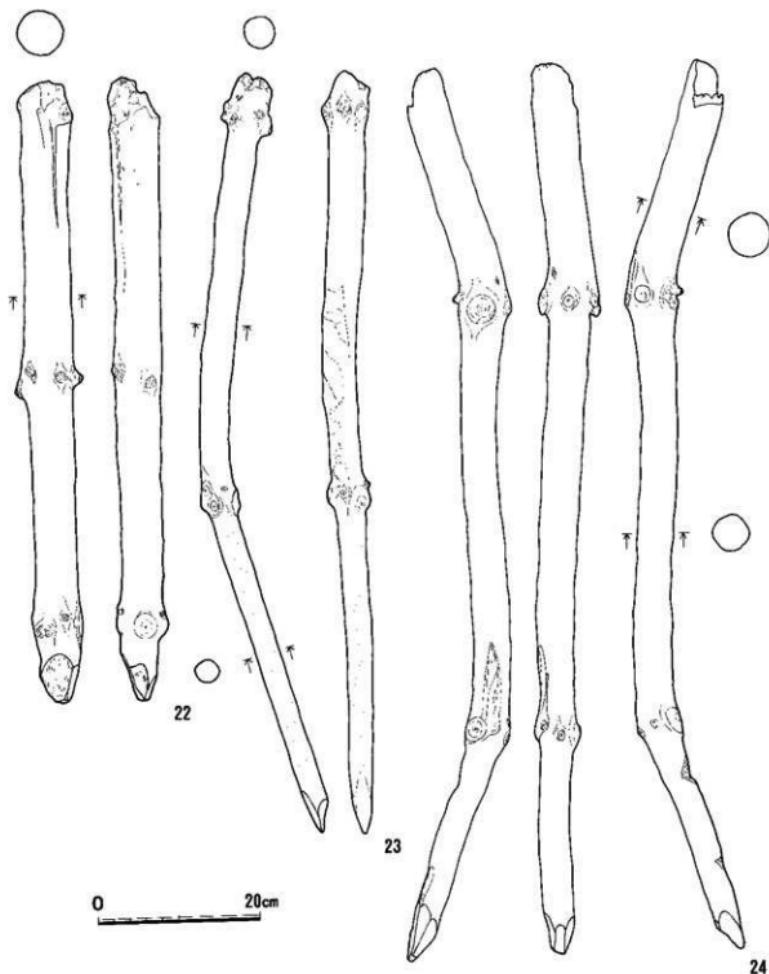


図27 第7次調査II区 自然流路02出土木製品（杭群、1／6）

2 Ⅲ区

(1) 第3層上面の自然流路・遺物

a 自然流路03(図28、図版9)

調査区内の大半を占め、南北方向に流れる。調査区北西に、西肩部がある。深さ約1.3mで、下底面の標高は-1.2mを測る。埋土は、黒褐色粘土、オリーブ黑色細砂等からなる。遺物は木製品1のみであるため、流路存続の時期比定は出来ない。

木製品(図29-25)

25は、自然流路03下底面から出土した、長さ19.5cm、幅10.8cm、厚さ2.2cmを測る板目板材。上端は折損、下端は切断。一部に焦痕を残す。

第4節 小結

本次調査においても、東隣の第6次調査区と同様、縄文期に形成された砂洲(第3層)が検出された。

東西断面から看取出来る様に、アカホヤ火山灰降灰時(縄文前期初頭)に標高-3.5m付近にあった水底は、第4層(海成層)の堆積によって徐々に浅くなり、縄文中期頃からは、西側丘陵端部を基点にして砂洲が東側へ伸長していった様である。

砂洲上は陸化し、調査区内を自然流路01・01'・02が流れる。断面観察から、自然流路01'埋積後に、これを切って自然流路01が流れるが、これらと自然流路02・03、第6次調査区自然流路との共時性ないし先後関係は明確でない。これらの流路群埋土上位を覆う様に、古墳後期遺物を含む第2層下位砂層(河川性砂礫層)が堆積するので、当該期には自然流路01、02とも埋積していた様である。

自然流路01北側肩部付近からは、板材、容器等とともに垂直に打ち込まれた建築部材転用杭が検出された。検出位置は調査区東壁際で、調査区外にも関連遺構が存在する可能性があるが、残念ながら本次調査では明らかにし得なかった。機能・用途は明確でないものの、自然流路01に対する何らかの人为的利用の痕跡として理解出来よう。

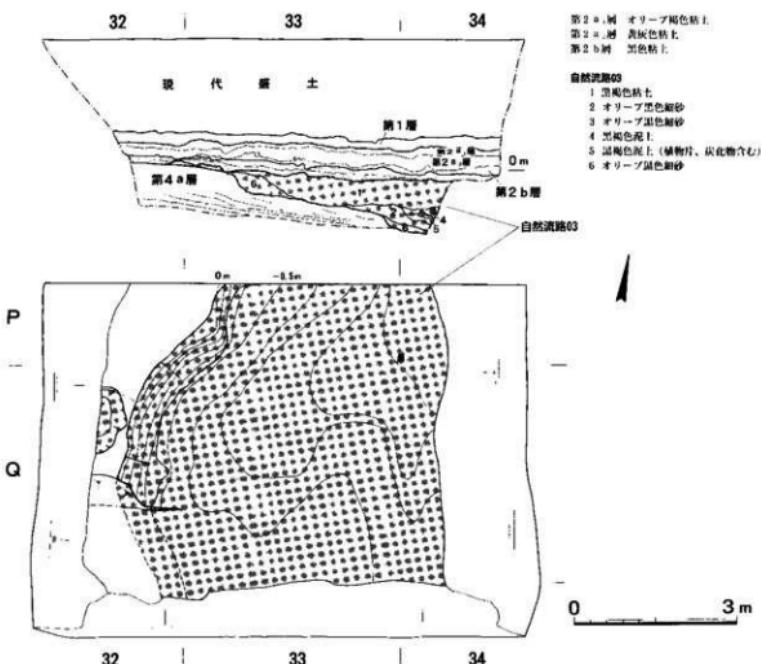


図28 第7次調査Ⅲ区 第3層上面平面図・北壁断面図 (1/90)

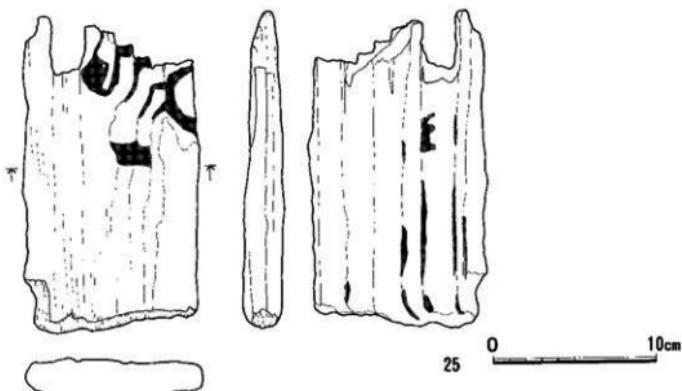


図29 第7次調査Ⅲ区 自然流路03下底面出土木製品 (1/3)

表1 出土遺物観察表

図 No.	次数 Grid	層位他	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①船上 ②焼成	備考
8-1	6-B3	自然流路	須恵器 (模版)	外: 平行タタキ目、カキ目 内: 同心円状当て具痕、カキ目	外: 灰色 内: 灰色	①1mm以下長石少し含む ②良好	
-2	6-B3	自然流路	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ、底部静止 糸切り痕 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①1mm以下長石少し含む ②良好	
13-1	7H-M13	第4a層	繩文 (深鉢)	キャリパー形11線部 外: Rの深浅繩文 内: ナデ	外: 黒褐色 内: 黑褐色	①1~2mm石英・長石含む ②良好	船元IV式
-2	7H-N6	第4a層	磨石	長軸: 11.5cm 短軸: 10.3cm 重量: 1.1kg	オリーブ灰色	石材: 玄武岩	
18-1	7I-J2	第2層	須恵器 (甕)	外: 平行タタキ目 内: 同心円状当て具痕	外: 灰色 内: 灰色	①0.5mm以下黒色砂粒含む ②良好	
-2	7I-E2	第2層	須恵器 (甕)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰オーリーブ色 内: 灰オーリーブ色	①2mm以下長石少し含む ②良好	
-3	7I-F2	自然流路01 最下層	繩文 (鉢)	外: 斜方向ケズリ 内: ナデ	外: 黄灰色 内: 黄灰色	①0.5mm以下長石・黒色砂粒 含む ②良好	
-4	7I-J2	自然流路01 下層	弥生 (甕)	外: ナデ 内: 指頭正痕	外: 喀灰黄色 内: 喀灰黄色	①1~3mm長石・石英多く 含む ②良好	
-5	7I-E2	自然流路01 下底面	土師器 (甕)	外: ナデ	外: にぶい黄色 内: にぶい黄色	①1mm以下長石・石英含む ②良好	
-6	7I-E2	自然流路01 最下層	土師器 (甕)	外: ナデ 内: 口縁部ナデ、胴部へ ラケズリ	外: 喀灰黄色 内: 喀灰黄色	①1mm以下長石・石英含む ②良好	
-7	7I-F2	自然流路01 上層	土師器 (甕)	外: ナデ 内: 口縁部ナデ、胴部へ ラケズリ	外: 喀灰黄色 内: オリーブ黄色	①1mm以下長石・石英含む ②良好	外面煤付 着
-8	7I-F2	自然流路01 上層	土師器 (甕)	外: ハケ目 内: 口縁部ナデ、胴部へ ラケズリ	外: 喀黄色 内: 黄灰色	①1mm以下長石・石英含む ②良好	外面煤付 着
-9	7I-G1	自然流路01 下層	須恵器 (甕)	外: 平行タタキ目 内: 同心円状当て具痕	外: 灰白色 内: 灰白色	①精良 ②良好	外面自然 釉
-10	7I-F1	自然流路01 下層	須恵器 (杯蓋)	外: 回転ナデ、前部2条 沈紋 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①5mm以下黒色砂粒多く含 む ②良好	
19-11	7I-G1	自然流路01 下層	須恵器 (甕)	外: 平行タタキ目 内: 同心円状当て具痕	外: 灰色 内: 灰色	①精良 ②良好	外面自然 釉
-12	7I-G2	自然流路01 下底面	須恵器 (甕)	外: 平行タタキ目 内: 同心円状当て具痕	外: 灰白色 内: 灰白色	①0.5mm以下長石少し含む ②良好	外面自然 釉
-13	7I-K2	自然流路01 下底面	弥生 (甕)	外: ナデ 内: ナデ	外: 黄灰色 内: 黄灰色	①1~3mm長石多く含む ②良好	
-14	7I-L2	自然流路01 埋土	土師器 (置台)	外: ナデ	外: 喀黄色 内: 喀黄色	①0.5mm以下長石多く含む ②良好	
-15	7I-M2	自然流路01 下底面	弥生 (甕)	外: 口縁部9条の擬凹線 内: 脛部へラケズリ	外: 黒褐色 内: 黑褐色	①0.5mm以下長石含む ②良好	
-16	7H-N20	自然流路02 下底面	土師器 (甕)	外: ナデ 内: ナデ	外: 黑褐色 内: 黑褐色	①0.5mm以下長石含む ②良好	
-17	7H-N21	自然流路02 下底面	土師器 (高杯)	外: ナデ 内: ナデ	外: 喀黄色 内: 黑褐色	①0.5mm以下長石・黒色砂粒 少し含む ②良好	
-18	7H-M20	第2層下位 砂層	須恵器 (蓋杯身)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 次色 内: 灰色	①0.5mm以下長石含む ②良好	

第5章 島根大学構内遺跡（橋本地区）の古環境復元

1 地質学的検討からみた橋本地区の古環境

様田祐久

立地概要

島根大学構内遺跡は松江低地北部に位置する（図30）。遺跡の北には島根半島の真山山系から伸びる丘陵が迫り、遺跡範囲の一部は丘陵上にあるが、今回の調査範囲は低地に立地する。

本遺跡がある松江低地は、中国山地北縁と島根半島に挟まれた宍道低地帯に発達する小規模な沖積低地である。

これまでに、島根大学構内遺跡およびその東に位置する西川津遺跡、原の前遺跡の発掘調査に伴って松江低地の層序および古環境が検討されてきており、島根大学埋蔵文化財調査研究センター編（1996）、島根県教育委員会編（1995）などに報告されている。これらによると、松江低地は次のような特徴を持つ。

松江低地の地下には軟弱な完新統泥層が分布し、最大層厚10mをこえる。この地層は宍道湖湖底から出雲平野に連続する。完新統泥層には6300年前に降灰した鬼界アカホヤ火山灰層（以下、アカホヤ）が挟まれている。本遺跡では橋繩手地区と深町地区の発掘調査に際して、調査トレーンチ内で確認されている。諸出地区ではボーリングコアでアカホヤが確認され、その下位に内湾生貝化石が多産する層準が確認されている。

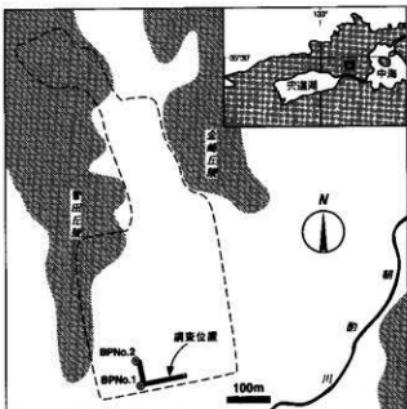


図30 島根大学構内遺跡の周辺地形と調査地点およびボーリング地点

本調査区の層序

本調査区は標高3.0mの平坦な場所にあり、地表から深さ5.6m（トレンチ底の標高-2.6m）までトレンチを掘削し、発掘調査を行った。トレンチおよび2地点で採取されたボーリングコア（図31）の観察結果を記載する。

地表から標高0.8mは大学施設建設に伴うごく新しい時期の盛土である。盛土の直下に厚さ0.4mの旧水田土壌が分布し、標高0.4m以深が自然堆積層である。

自然堆積層は次のように区分できる。標高0.4～-0.2mは細粒砂層（第3層）、標高-0.2～-2.0mは砂泥互層（第4a層）、標高-2.0m以深は泥層である。泥層は標高-2.7m付近を境に、これより上位ではオリーブ黒色（第4b層）、下位では暗青灰色（第4c層）を示す（図32）。第4c層は標高-7m付近まで連続し、その下には更新統が分布する。

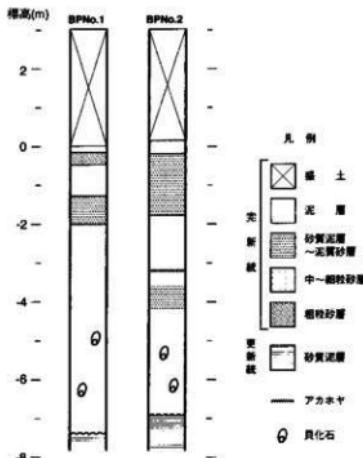


図31 ボーリング柱状図

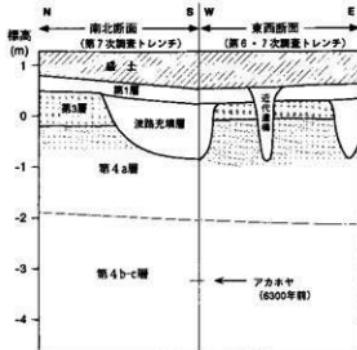


図32 第6・7次調査区の模式層序

各層の特徴

・第3層

第3層は層厚0.7mである。大変淘汰のよい細粒砂からなり、灰色～灰黄色を示す。肉眼的には塊状無構造である。一部で下位層を削り込んで重なる様子が観察される。第3層の上部は土壤化によって植物片に富む泥が混入している。

・第4a層

第4a層は層厚1.8mである。上方粗粒化を示し、標高-1.2m付近を境にこれより上部では泥葉層と砂葉層からなる平板状斜交葉理が顕著である。葉理面は走向N30°～50°E、7°～11°S落ち傾斜を示す（写真1）。

・第4b層

第4b層は層厚0.7mである。やや有機質にとんだ塊状の泥層からなり、ヤマトシジミの化石が点在する。

・第4c層

第4c層はボーリングで確認された地層で、層厚4m程度である。BP2では標高-3.3mにアカホヤ火山灰層（6300年前）が層厚0.3cmの地層として確認できた。標高-4m以深には貝化石片が点在する。第4c層の基底部は有機質に富む。

・更新統

礫や砂分を含む淘汰の悪い砂質泥層で、よく縮まっている。最上部は土壤化している。

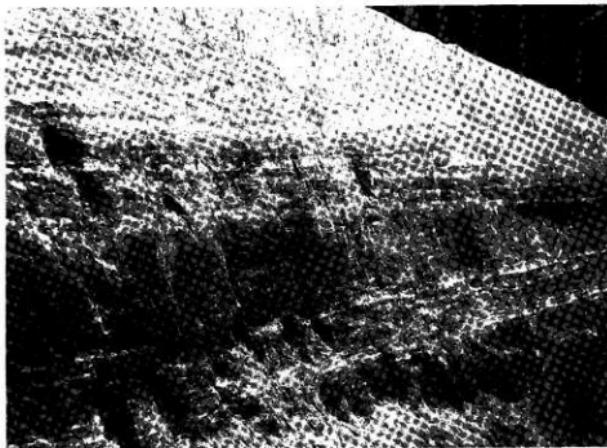


写真1 斜交葉理が顕著な砂泥互層 東西断面を北側から撮影

堆積環境

層序・層相から推定される各層の堆積環境を述べる。なお、時間経過に沿うために下位から順に述べる。

第4c層は6300年前に降灰したアカホヤを挟む。この地層は、縄文海進によって当地が内湾となり、その海底に堆積したと考えられる。中村・徳岡（1997）は松江低地から宍道湖底の堆積層に共通して、アカホヤの下位に内湾生貝化石が多産する層準が存在することを指摘し、この層準の堆積時が宍道湖地域でもっとも海の影響が強くなった時期と推定している。構内遺跡諸田地区（2次調査）においても貝化石多産層準が確認されている。本調査区でもアカホヤの下位に貝化石が点在しており、上記の貝化石多産層準に対比できると思われる。

第4b層は第4c層の堆積時から引き続いて水底に堆積したと考えられる。低塩分汽水に生息するヤマトシジミの化石が含まれることから、第4c層堆積時に比べて水域が低塩分化したと考えられる。ヤマトシジミの化石は石灰質の殻が溶脱している。一般に汽水堆積物の間隙水は炭酸カルシウムに不飽和であるために殻は溶脱していることが多い。

第4b層と第4c層の色調の違いは水域環境の変化を反映していると推定される。第4b層が暗い色調を示す要因は、堆積物中に占める有機物濃度が第4c層に比べて高いためと思われる。

第4a層は斜交葉理が発達している。堆積の進行によって水深が小さくなり、波浪や潮汐流によって砂分が供給される環境へ変化したと考えられる。同様の斜交葉理を持つ地層は諸田地区でも確認されており、葉理の繰り返しパターンから、潮汐の周期的な変動を反映している可能性が指摘されている（島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1996編）。この地層は層序・層相と分布深度から、本調査区の第4a層と連続した地層と考えられる。

第3層は泥分を含まない淘汰のよい砂層で、離水した砂州の堆積層と考えられる。諸田地区でも斜交葉理が発達する地層の上位に、本層と同様の砂層が分布しており、連続した地層と考えられる。第4a層の葉理面の示す走向と傾斜から、第4a層と第3層は南東方向に順次付加されたと考えられる。これらの層は概ね縄文期の堆積と考えられることから、当該期に本遺跡の西に位置する菅田丘陵を足がかりに発達した砂州が南東方向へ伸びていたことが推定される。

第3層の堆積後、本調査区は陸化した。第3層以下を削り込んで自然流路が形成された時期があり、この流路は構内遺跡の北側の丘陵から流れ出た水流によって形成されたと推定される。

第4a層から出土した土器について

第4a層からは縄文時代中期の上器片が出土した（写真2）。上述のように第4a層は泥と細粒砂が規則的な斜交葉理をなし、波浪や潮汐流の影響はあるものの比較的静かな水域に堆積したと考えられる。

土器片は泥層に含まれ、同層準に粗粒物を伴わないことから、水流によって遠くから運搬されて

きたものではないと考えられる。人為的に水中に投じられたと考えるのが妥当である。



写真2 土器片の出土状態

謝辞

小稿をまとめるにあたり、中村唯史氏（島根大学汽水域研究センター）からは、図面作製の御協力とともに、有益な御助言、御指導を頂きました。文末ですが記して感謝致します。

文献

- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター編, 1996:島根大学構内遺跡発掘調査概報II(諸田地区1), 38p.
島根大学埋蔵文化財調査研究センター編, 1997:島根大学構内遺跡第1次調査(橋繩手地区1), 138p.
島根大学埋蔵文化財調査研究センター編, 1998:島根大学構内遺跡第3次調査(深町地区1), 96p.
島根県教育委員会編, 1995:朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告「原の前遺跡」, p198.
中村唯史・徳岡隆夫, 1996:宍道湖ボーリングSB1から発見されたアカホヤ火山灰と完新世の古地理変遷についての再検討. 島根大学地球資源環境学研究報告, 15, 35-40.

2 島根大学構内遺跡第7次調査（橋本地区2）の花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント（株））

はじめに

島根大学構内遺跡では、1次、3次調査の際に花粉分析が実施されてきた（川崎地質株式会社、1997、1998）。これらの報告では、主に縄文時代早期末から前期にかけての層準を対象とした分析が行われてきた。また周辺の西川津遺跡、原の前遺跡、タテヨウ遺跡では積極的に花粉分析が行われてきたものの、堆積年代の明らかなデータが少なく、この地域での花粉組成変遷（地域花粉帯）を論じる上での問題点となっていた。

このような状況下で、今回は5世紀から6世紀にかけてのきわめて短期間の堆積物（自然流路02埋土）を対象として花粉分析を行った。

分析試料について

分析した試料は島根大学埋蔵文化財調査研究センターにより採取され、提供を受けたものである。図33に試料採取地点（自然流路02埋土南壁）を示す。図34の柱状図右側の数字が試料番号で、採取深度に示した。

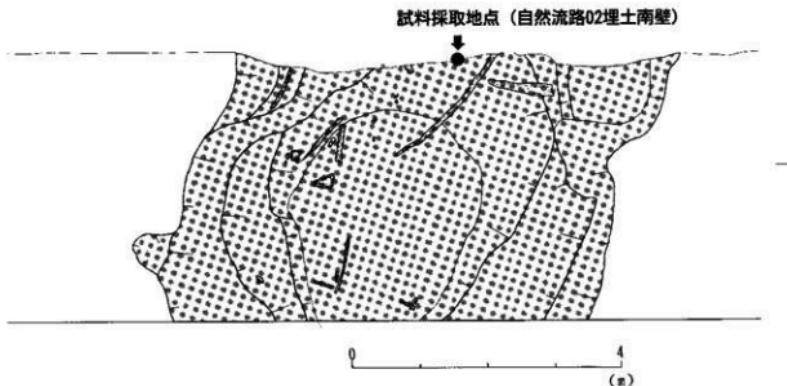


図33 試料採取地点

分析方法および分析結果

(1) 分析方法

処理を渡辺（1995）に従って行った。顕微鏡観察は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。

(2) 分析結果

花粉分析結果を図34の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基準にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。

すべての試料でアカガシ亜属が40%程度の出現率を示すほか、マツ属（複雑管束亜属）、スギ属、コナラ亜属が10～20%程度の出現率を示す。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が20～40%程度の出現率を示すほか、カヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）、ヨモギ属も10～20%程度の出現率を示す。

また、今回の分析結果では顕著な花粉組成の変化が認められなかったことから、花粉分帶（地域花粉帶の設定）を行わなかった。

既知の結果との比較

今回分析を行った層準は、前述のように出土遺物から5世紀頃から6世紀後半に堆積したと考えられる。過去に島根大学構内遺跡で花粉分析が行われた地点のうち、1次調査（橋縄手地区）のI帶（川崎地質株式会社、1997）が奈良時代頃以降と、今回に近い堆積年代を示す。両分析結果に顕著な差は無く、アカガシ亜属が卓越し、マツ属（複雑管束亜属）、スギ属、コナラ亜属を伴うという特徴を有し、大西（1993）のイネ科花粉帶スギ亜帯に相当する。

一方、近隣の西川津遺跡、タテチョウ遺跡では花粉分析が積極的に行われているものの、同時期と断定できる試料は今のところ無い。

古環境復元

5から6世紀頃の調査地周辺の古植生は、以下の様に推定できる。

試料を採取した自然流路02の周りにはヨモギなどのキク科やイネ科などの草本が生育し、流路内側の水辺にはイネ科やカヤツリグサ科の草本の生育していた可能性もある。

イネ科（40ミクロン以上）の出現率が20～40%程度とやや高い傾向にあり、現状では水田遺構が検出されていないが、近くで水田耕作が行われていた可能性も指摘できる。

周辺の丘陵から北山山地には、広くカシ類やシイ類を要素とする照葉樹林で覆われ、一部にニヨウマツ類やナラ類を要素とする二次林が分布していたと考えられる。またスギの生育環境には不明な点が多いが、谷筋の湿地に主として分布していたと考えられる。

まとめ

島根大学構内遺跡7次調査に伴い花粉分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 5から6世紀の間の花粉組成は、大西(1993)のイネ科花粉帯スギ亜帯に対応する。
- (2) 遺跡周辺での5から6世紀の間の古植生を推定した。
 - ① この間およそ100年間は、植生の変化がほとんど無かった。
 - ② 遺跡の近くで水田耕作が行われていた可能性が指摘できる。

引用文献

- 川崎地質株式会社(1997)橋綱手地区における花粉・珪藻分析(概報).島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊
島根大学構内遺跡第1次調査(橋綱手地区1), 116-121, 島根大学埋蔵文化財調査研究センター, 島根.
- 川崎地質株式会社(1998)深町地区の花粉・珪藻分析(概報).島根大学埋蔵文化財調査研究報告第2冊 島根大
学構内遺跡第3次調査(深町地区1), 56-63, 島根大学埋蔵文化財調査研究センター, 島根.
- 大西郁夫(1993)中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帶と植生変化.地質学論集, 39, 33-39.
- 渡辺正巳(1995)花粉分析法.考古資料分析法, 84, 85.ニュー・サイエンス社.

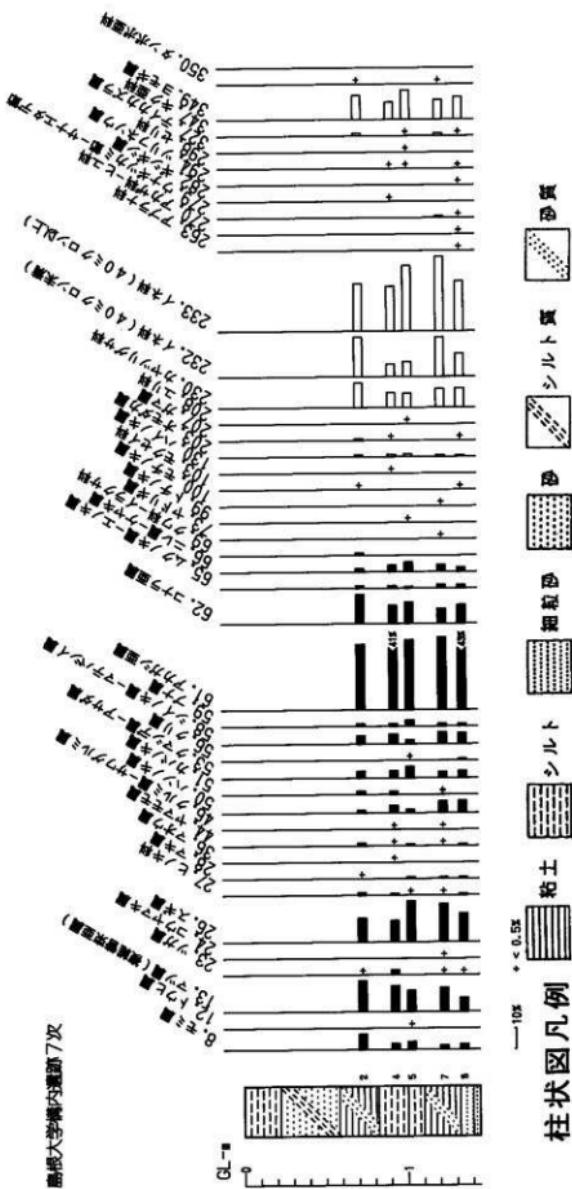


図34 花粉ダイヤグラム

3 島根大学構内遺跡第6・7次調査において出土した木材の樹種

森林総合研究所木材利用部 能城修一

島根大学構内遺跡第6次調査（橋本地区1）および第7次調査（橋本地区2）から出土した木材の樹種を報告する。対象とした木材は自然木、容器、板、杭、角材など73点である。各地区における出土層準と点数は、第6次調査（橋本地区1）では奈良時代の自然流路から11点、第7次調査（橋本地区2）では縄文時代前期－中期の第4b層から3点、弥生時代－古墳時代後期の自然流路01'から9点、古墳時代後期以前の自然流路01から18点、古墳時代後期の第2層から13点、古墳時代中期－後期の自然流路02から18点、奈良時代の自然流路から11点、Ⅲ区の自然流路から1点であった。樹種同定用のプレパラート作製は島根大学埋蔵文化財調査研究センターの手で行われた。これらのプレパラートは同センターに保存されている。以下には分類群の簡単な記載をおこない、代表的な標本の顕微鏡写真を示して同定の根拠を明らかにする。

1. マキ属 *Podocarpus* マキ科 図1：1a-1c（枝・幹材，SHIM-281）

垂直および水平のいずれの樹脂道ももたない針葉樹材。晩材は量少なく、早材からの移行は緩やか。樹脂細胞は年輪内に均一に散在し、その水平壁はほぼ平滑。分野壁孔は小型のヒノキ型ないしトウヒ型で1分野に1－2個。

2. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch イヌガヤ科 図1：2a-2c（枝・幹材，SHIM-271）

垂直および水平のいずれの樹脂道ももたない針葉樹材。晩材は量少なく、早材からの移行は緩やか。木部柔組織は年輪内に均一に散在し、その水平壁は結節状。仮道管の内壁には斜めに走るらせん肥厚がある。分野壁孔はごく小型のヒノキ型で1分野に2－4個。

3. モミ属 *Abies* マツ科 図1：3a-3c（枝・幹材，SHIM-318）

ふつうは垂直および水平のいずれの樹脂道ももたない針葉樹材。晩材は量多く明瞭で、早材からの移行は緩やかないしやや急。樹脂細胞はふつう見られない。放射組織は柔細胞のみからなり、その垂直壁は多数の単壁孔のため結節状を呈する。分野壁孔はごく小型のスギ型で1分野に2－4個。

4. マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図2：4a-4c（枝・幹材，SHIM-313）

垂直および水平の樹脂道をもつ針葉樹材。晩材は量多く明瞭で、ふつう早材からの移行はやや急。

樹脂道の分泌細胞は薄壁で残りにくい。放射組織は柔細胞と放射仮道管とからなり、放射仮道管の水平壁には鋸歯が著しい。分野壁孔は大型の窓状で1分野に1個。

5. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 図2: 5a-5c (枝・幹材, SHIM-251)
垂直および水平のいずれの樹脂道ももたない針葉樹材。晩材は量やや多く、早材からの移行はやや急。樹脂細胞は早材の終わりから晩材において年輪界に平行するように散在する。分野壁孔はごく大型のスギ型で、孔口はほぼ水平に開き、1分野に2個。

6. サワラ *Chaecyparis pisifera* (Sieb. Et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図2: 6a-6c (枝・幹材, SHIM-276)

垂直および水平のいずれの樹脂道ももたない針葉樹材。晩材は量少なく、早材からの移行は緩やか。樹脂細胞は早材の終わりから晩材において年輪界に平行するように散在する。分野壁孔はやや大型のヒノキ型で1分野に2個。

7. ノグルミ *Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc. クルミ科 図3: 7a-7c (枝・幹材, SHIM-270)

やや大型でやや厚壁のまるい管孔が年輪のはじめに1-3列ほど集合し、晩材では管孔が単独あるいは2-5個放射方向に複合して、徐々に径を減じながら、1列幅の火炎状に散在する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で3細胞幅くらいの帯状。道管の穿孔は單一。放射組織は上下端の1-2細胞が直立する異性で、ときに大型の結晶をもつ。

8. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図3: 8a-8c (枝・幹材, SHIM-298)

大型でまるい管孔が年輪のはじめに數列集合し、晩材では徐々に径を減じた管孔がほぼ単独で火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材でいびつな接線状で著しい。道管の穿孔は單一。放射組織は単列同性。

9. スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ex Yamazaki et Mashiba ブナ科 図3: 9a-9c (枝・幹材, SHIM-293)

中型でまるい管孔が年輪のはじめに放射方向にのびる塊をなして散在し、晩材ではそこから径を徐々に減じた小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材でいびつな接線状で著しい。道管の穿孔は單一。放射組織は単列同性。

10. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図4: 10a-10c (枝・幹材, SHIM-294)

大型でまるい管孔が年輪のはじめに1-2列配列し、晩材では急に径を減じたまるい厚壁の管孔が放射状に配列する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材でいびつな接線状で著しい。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものと複合状の大型のものとからなる。

11. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図4:11a-11c (枝・幹材, SHIM-259)

大型でまるい管孔が年輪のはじめに1-2列配列し、晩材ではやや急に径を減じた小型で薄壁の管孔が放射状から火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材でいびつな接線状で著しい。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものと複合状の大型のものとからなる。

12. モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図4:12a-12c (枝・幹材, SHIM-321)

やや小型でやや角張った管孔が単独あるいは放射方向に2-3個複合して均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。道管相互壁孔は階段状。放射組織は同性で1-2細胞幅。

13. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図5:13a-13c (枝・幹材, SHIM-254)

ごく小型の単独管孔が年輪内で徐々に径を減じながら均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状ないし短接線状。道管の穿孔は数本の横棒からなる階段状。放射組織は異性で2細胞幅、多列部も10細胞以下と背は低く、しばしば単列部に大型の結晶をもつ。

14. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図5:14a-14c (枝・幹材, SHIM-301)

ごく小型でやや角張った単独管孔が年輪内であまり径を変化させることなく密に均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状ないし短接線状。道管の穿孔は20-30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性でほぼ単列、ときに一部2列幅となる。

15. ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 図5:15a-15c (枝・幹材, SHIM-323)

ごく小型の単独管孔が年輪内であまり径を変化させることなく密に均一に散在する散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で2-4細胞幅。

16. ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 図6:16a-16c (枝・幹材, SHIM-279)

ごく小型でやや角張った単独管孔が年輪内で径を変化させることなく均一にややまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は数十本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で1-4細胞幅、背がたかく、多列部には鞘細胞をもつ。

17. サクラ属 *Prunus* バラ科 図6:17a-17c (枝・幹材, SHIM-283)

小型でまるい管孔が単独あるいは2-4個ほど複合して、斜めあるいは接線方向に連なる傾向をときに見せて散在する散孔材。管孔の直径は年輪内で徐々に減少する。道管の穿孔は单一、道管の内壁にはらせん肥厚をもつ。放射組織は上下端の1-数細胞が直立あるいは方形細胞からなる異性で、1-4細胞幅くらい。

18. ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 図6:18a-18c (枝・幹材, SHIM-319)

大型でまるい管孔がほぼ単独で年輪のはじめに2-3列集合し、晩材では徐々に径を減じた小管孔が単独あるいは2-数個複合してまるい塊をなしてまばらに散在する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で翼状から連合翼状。道管の穿孔は单一。放射組織は同性で1-3細胞幅、いびつな外形をもつ。

19. カエデ属 *Acer* カエデ科 図7:19a-19c (枝・幹材, SHIM-322)

やや小型でまるい管孔が単独あるいは放射方向に2-3個複合してややまばらに均一に散在する散孔材。基本組織は木繊維の壁厚の変化により雲紋状を呈する。道管の穿孔は单一、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で1-10細胞幅くらい。

20. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図7:20a-20c (枝・幹材, SHIM-292)

大型でまるい単独管孔が年輪のはじめに2-3列集合し、晩材では徐々に径を減じた小管孔が単独あるいは放射方向に2-数個複合してややまばらに散在する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で翼状からいびつな帯状をなし、著しい。道管の穿孔は单一、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で1-4細胞幅くらい。

21. リョウブ *Clethra barbinervis* Sieb. et Zucc. リョウブ科 図7:21a-21c (枝・幹材, SHI M-295)

やや小型でまるい単独管孔が年輪内で徐々に径を減しながらまばらに散在する散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は30-40本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は上下端の1-3細胞が直立する異性で、1-5細胞幅くらい。

22. サワタギ *Symplocos chinensis* (Lour.) Druee var. *leucocarpa* (Nakai) Ohwi f. *pilosa* (Nakai) Ohwi ハイノキ科 図8:22a-22c (枝・幹材, SHIM-255)

やや小型でまるい単独管孔が均一にややまばらに散在する散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は上下端の1-5細胞ほどが直立する異性で、1-2細胞幅、多列部から單列部への移行はごく明瞭である。

23. ガマズミ近似種 *Viburnum cf. dilatatum* Thunb. スイカズラ科 図8:23a-23c (枝・幹材, SHIM-303)

小型でまるい単独管孔が均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状ないし短接線状。道管の穿孔は30-40本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で、1-3細胞ほどの單列部と3細胞幅くらいの紡錘形の多列部をもつ。

総計73点の木材はいずれも幹あるいは枝の材で23分類群が見いだされた(表2)。層準ごとの出土点数がいずれも20点以下のため、時代ごとのはっきりした傾向をつかむには不十分である。全体的にはマツ属複雑管束亜属およびスギが比較的おおく、まんべんなく出土している。これ以外ではクヌギ節やサカキ、ヒサカキ、サワラ、ネムノキがやや多く、あとは1, 2点ずつ見いだされた。

表2 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木村の樹種

樹種名	層 級						合計		
	7次4b層 自然木	7次-自然流路01 角材杭不可	7次-自然流路01 自然木骨材板	7次-自然流路02 角材杭	7次-自然流路02 加工材	6次-自然流路03 板		6次-自然流路03 自然木板	6次-自然流路03 杭
1 マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2 イヌカヤ	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3 モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2
4.5 マツ属	-	-	-	-	-	4	-	10	18
5 スギ	-	-	-	-	-	-	-	-	1
6 サワラ	-	-	-	-	-	-	-	-	12
6.5 ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	3
7 ノグリミ	-	-	-	-	-	-	-	-	2
8 クリ	-	-	-	-	-	-	-	-	2
9 スダジイ	-	-	-	-	-	-	-	-	1
10 コナラ属クヌギ節	-	-	-	-	-	-	-	-	4
11 コナラ属コナラ節	-	-	-	-	-	-	-	-	1
12 モクレン属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
13 ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
14 サガキ	-	-	-	-	-	2	-	-	4
15 ヒサカキ	-	-	-	-	-	-	-	-	4
16 ヴツギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
17 サクラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
18 ケムノキ	-	-	-	-	-	-	-	-	3
19 カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1
20 ムクロジ	-	-	-	-	-	-	-	-	1
21 リヨウブ	-	-	-	-	-	1	-	-	1
22 サワタガ	-	-	-	-	-	-	-	-	1
23 ガマズミ近似種	-	-	-	-	-	-	-	-	1
24 開定不能	-	-	2	-	-	-	-	-	2
合計	3	3	2	1	1	9	1	3	4
							2	4	13
									72

すべて枝・幹材。

表3 墓報大学墓内遺物第6・7次調査出土木材一覧

No.	Photo	樹種名	製品名	図No.	Grid	採集地	樹種・遺構	時代	次數／地区
SHIM-251*	スキ	S	板材	図9-1	B3	970417	自然流路(埋土内)	奈良	6次(備木)
SHIM-252	スキ	S	板材	図9-2	B4	970424	自然流路(埋土内)	奈良	6次(備木)
SHIM-253	スキ	S	板材	図9-3	A3	970417	自然流路(埋土内)	奈良	6次(備木)
SHIM-254*	ツバキ属	S	杭	図10-4	A4	970424	自然流路(埋土内)	奈良	6次(備木)
SHIM-255*	ツワツタ属	S	杭	図10-5	B4	970424	自然流路(埋土内)	奈良	6次(備木)
SHIM-256	マツ属 檜	S	杭	図10-6	B3	970414	自然流路(埋土内)	奈良	6次(備木)
SHIM-257	ヒサカキ	S	杭	図10-7	A3/B3	970423	自然流路(埋土内)	奈良	6次(備木)
SHIM-258	クリ	S	自然木	図10-7	A2	970416	自然流路(埋土上層)	奈良	6次(備木)
SHIM-259*	コナラ属 コナラ属	S	自然木	図10-7	B4	970424	自然流路(埋土内)	奈良	6次(備木)
SHIM-260	マツ属 椎葉管東西属	S	自然木	図10-7	A2	970416	自然流路(埋土上層)	奈良	6次(備木)
SHIM-261	ヒキ科	S	自然木	図20-1	E2	971110	自然流路(埋土内)	奈良	7次(備木)
SHIM-262	スキ	S	被葉部材 軸用材	図20-2	F2	971110	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-263	スキ	S	板材	図21-3	K2	971106	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-264	ツワツタ属	S	杭	図21-4	G2	971107	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-265	スキ	S	板材	図22-5	G2	971107	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-266	スキ	S	容器	図22-6	F2	971110	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-267	スキ	S	板材	図22-6	F2	971110	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-268	モミ属	S	角材	図23-7	F2	971110	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-269	ヒサカキ	S	角材	図23-8	F2	971110	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-270*	ノタルミキ	S	角材	図23-9	F2	971107	自然流路(埋土下層)	～古墳後期	7次(備木)
SHIM-271*	イヌカヤ	S	杭	図24-10	M3	971111	自然流路(埋土上部)	生糸～古墳後期	7次(備木)
SHIM-272	スキ	S	板材	図24-11	H2	971201	自然流路(埋土上部)	生糸～古墳後期	7次(備木)
SHIM-273	X	---	採取不可	図24-12	N3	971201	自然流路(埋土上部)	生糸～古墳後期	7次(備木)
SHIM-274	X	---	採取不可	図24-13	N3	971201	自然流路(埋土上部)	生糸～古墳後期	7次(備木)
SHIM-275	ツワツタ属	S	角材	図24-14	N3	971201	自然流路(埋土内)	生糸～古墳後期	7次(備木)
SHIM-276*	ツムギキ	S	板材	図24-15	N3	971201	自然流路(埋土内)	生糸～古墳後期	7次(備木)
SHIM-277	マツ属 椎葉管東西属	S	加工材	図26-16	M20	971205	自然流路02(埋土内)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-278	マツ属 椎葉管東西属	S	加工材	図26-17	M20	971224	自然流路02(埋土内)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-279*	ツバキ属	S	円材	図26-18	M20	971127	自然流路02(埋土内)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-280	マツ属 椎葉管東西属	S	杭	図26-19	M21	971215	自然流路02(埋土内)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-281*	マキ属	S	杭	図26-20	N21	971217	自然流路02(下底面)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-282	スキ	S	杭	図26-21	N21	971215	自然流路02(下底面)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-283*	ツワツタ属	S	杭	図27-23	M20	971219	自然流路02(杭1)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-284	マツ属 椎葉管東西属	S	杭	図27-23	M20	971219	自然流路02(杭2)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-285	コナラ属 コナラ属	S	杭	図28-1	M20	971219	自然流路02(杭3)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-286	クサキ	S	杭	図23-24	M20	971219	自然流路02(杭4)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-287	クサキ	S	杭	図23-25	M21	971219	自然流路02(杭5)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-288	マツ属 椎葉管東西属	S	杭	図24-1	P34	971210	自然流路03(下底面)	古墳中～後期	7次(備木)
SHIM-289	スキ	S	板材	図24-25	G1	971210	自然流路01(上層)	古墳後期	7次(備木)
SHIM-290	スガカキ	S	自然木	---	---	---	---	---	---
SHIM-291	スガカキ	S	自然木	---	---	---	---	---	---

SHIM-292*	ムクアシジ スダジイ	S 自然木	N3 971201「2層下位多層(自然流路0)」上位	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-293*	コナラ属クヌギ節	S 自然木	K1 971017 自然流路01(堆土内)	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-294*	リョウノフ	S 自然木	K2 971107 自然流路01(下层面)	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-295*	マツ属海椎管東西属	S 自然木	K2 971106 自然流路01(下层面)	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-296	ノゾクルミ	S 自然木	F2 971029 自然流路01(最下層)	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-297	クリ	S 自然木	F2 971110 自然流路01(最下層)	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-298*	スギ	S 自然木	G2 971105 自然流路01(最下層)	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-299	コナラ属クヌギ節	S 自然木	E2 971107 自然流路01(下层面)	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-300	サカキ	S 自然木	N3 971219 自然流路01(堆土内)	生土～古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-301**	ヒサガキ	S 自然木	N3 971219 自然流路01(堆土内)	生土～古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-302	ヒマラヤヒバ	S 自然木	M3 971217 自然流路01(堆土内)	生土～古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-303*	ガマズミ近似種	S 自然木	M3 971014 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-304	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M3 971217 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-305	ヒマラヤ科	S 自然木	M3 971208 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-306*	ネムノキ	S 自然木	M21 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-306*	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M21 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-307	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M20 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-308	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M20 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-309	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M20 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-310	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M20 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-311	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M20 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-312	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M20 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-313*	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M20 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-314	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M20 971215 第2層下位多層	古墳後期 7次(橋本2)II
SHIM-315	マツ属海椎管東西属	S 自然木	M21 971219 自然流路02上位	古墳中～後期 7次(橋本2)II
SHIM-316	サガキ	S 自然木	M21 971224 自然流路02(堆土内)	古墳中～後期 7次(橋本2)II
SHIM-317	モミ属	S 自然木	M21 971214 自然流路02(堆土内)	古墳中～後期 7次(橋本2)II
SHIM-318*	ネムノキ	S 自然木	N20 971217 自然流路02(下层面)	古墳中～後期 7次(橋本2)II
SHIM-319**	マツ属	S 自然木	N20 971217 自然流路02(下层面)	古墳中～後期 7次(橋本2)II
SHIM-320	モクレン属	S 自然木	N13 980126 第4b層	彌文前～中期 7次(橋本2)II
SHIM-321*	モクレン属	S 自然木	N14 980126 第4b層	彌文前～中期 7次(橋本2)II
SHIM-322*	カエデ属	S 自然木	N14 980126 第4b層	彌文前～中期 7次(橋本2)II
SHIM-323*	ヒサガキ	S 自然木		

表4 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の写真リスト

1. マキ属 桜・幹材 *Podocarpus* マキ科
 2. イヌガヤ 桜・幹材 *Cephaelotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch イヌガヤ科
 3. モミ属 桜・幹材 *Abies* マツ科
 4. マツ属 檜・幹材 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科
 5. スギ 桜・幹材 *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科
 6. サワラ 桜・幹材 *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. Et Zucc.) Endl. ヒノキ科
 7. グルミ 桜・幹材 *Platycarya strobilacea* Sieb. Et Zucc. グルミ科
 8. ツリ 桜・幹材 *Castanopsis crenata* Sieb. Et Zucc. ブナ科
 9. スダシイ 桜・幹材 *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hayata ex Yamazaki et Mashiba ブナ科
 10. コナラ属クヌギ属 桜・幹材 *Quercus sect. Aquilegia* ブナ科
 11. コナラ属ココナラ属 桜・幹材 *Quercus sect. Prunifolia* ブナ科
 12. モクレン属 桜・幹材 *Magnolia* モクレン科
 13. ツバキ属 桜・幹材 *Camellia* ツバキ科
 14. サカナ 桜・幹材 *Oleyera japonica* Thunb. ツバキ科
 15. ピサカニ 桜・幹材 *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科
 16. ツツギ属 桜・幹材 *Deutzia* ユキノシタ科
 17. サクラ属 桜・幹材 *Prunus* バラ科
 18. ネムノキ 桜・幹材 *Abies julibrissin* Durazz. マツ科
 19. カエデ属 桜・幹材 *Acer* カエデ科
 20. ムクロジ 桜・幹材 *Sapium mukorossi* Gaertn. ムクロジ科
 21. リョウフウ 桜・幹材 *Clethra barbinervis* Sieb. Et Zucc. リョウフウ科
 22. サワフタチ 桜・幹材 *Symplocos chinensis* (Lour.) Druce var. *leucocarpa* (Nakai) Ohwi & Pitcairn ハイノキ科
 23. ガマズミ近似種 桜・幹材 *Viburnum* of. *dilatatum* Thunb. シカズラ科
- 図1: 1a~1c (桜・幹材, SHIM-281)
 図1: 1a~2c (桜・幹材, SHIM-271)
 図1: 3a~3c (桜・幹材, SHIM-319)
 図2: 4a~4c (桜・幹材, SHIM-313)
 図2: 5a~5c (桜・幹材, SHIM-251)
 図2: 6a~6c (桜・幹材, SHIM-276)
 図3: 7a~7c (桜・幹材, SHIM-210)
 図3: 8a~8c (桜・幹材, SHIM-298)
 図3: 9a~9c (桜・幹材, SHIM-293)
 図4: 10a~10c (桜・幹材, SHIM-294)
 図4: 11a~11c (桜・幹材, SHIM-259)
 図4: 12a~12c (桜・幹材, SHIM-321)
 図5: 13a~13c (桜・幹材, SHIM-254)
 図5: 14a~14c (桜・幹材, SHIM-301)
 図5: 15a~15c (桜・幹材, SHIM-323)
 図6: 16a~16c (桜・幹材, SHIM-279)
 図6: 17a~17c (桜・幹材, SHIM-283)
 図6: 18a~18c (桜・幹材, SHIM-319)
 図7: 19a~19c (桜・幹材, SHIM-322)
 図7: 20a~20c (桜・幹材, SHIM-292)
 図7: 21a~21c (桜・幹材, SHIM-295)
 図8: 22a~22c (桜・幹材, SHIM-255)
 図8: 23a~23c (桜・幹材, SHIM-303)

第6章 まとめ

第6・7次調査区の橋本地区は、島根大学構内の最南端に位置しており、既往の第2・4次調査と併せて、その様相が明瞭にされた。本次調査区は、範囲が非常に長細であったため、平面的な様相を把握するうえでは制約があったが、一定の諸成果を得た。

調査区は、縄文時代前期段階では、泥底の水域内に位置していたが、海成層（第4層）の堆積によって徐々に浅水域化し、さらに、西側の丘陵先端部（現在の本部棟、教育学部棟）を基点に東伸してきた砂洲層の堆積によって陸域化した。地質学的な断面観察から、砂洲の形成自体は、非常に短期間のうちに伸長したことが判明している。砂洲形成の開始時期は、縄文中期頃を含むと推定し得るが、東隣の第2次調査区に連続する同一砂洲層中からは縄文晚期上器が出土しているから^①、その形成過程が、中断ないし後退・削平を含んだものであった可能性を想定しておきたい。

調査区内からは、この砂洲層上面（第3層上面）において数本の自然流路が、時期によって若干、進行位置をシフトさせながら存在していたことが判明しており、杭、土器等が検出されていることから自然流路に対する人為的利用の痕跡も伺える。

第7次調査I区・自然流路01における建築部材を転用した古墳後期推定の杭は、流路肩部付近に垂直に打ち込まれた状態で検出されている。用途、機能は明確でないが、周囲から板材、容器等もまとめて出土しており、これらとの有機的関連が推定される。なお、近隣の朝酌川流域、原の前遺跡においても同様の矢板状杭が打ち込まれた状態で検出されている^②。

今後の課題として、砂洲の平面範囲やその変遷を明確にしておく必要がある。この解明は、遺跡内の古地形変遷が明らかになるだけでなく、近隣の西川津遺跡、タテチョウ遺跡における初期農耕の胚胎と展開や古墳中期以降における金崎古墳群、薬師山古墳等の聳立を環境的側面から具体的に考察する上でも一資料になろう。

注

- (1) 会下和宏編『島根大学構内遺跡発掘調査概報II(諸田地区1)』島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1996年
- (2) 西尾克己他『朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡』島根県教育委員会
1995年

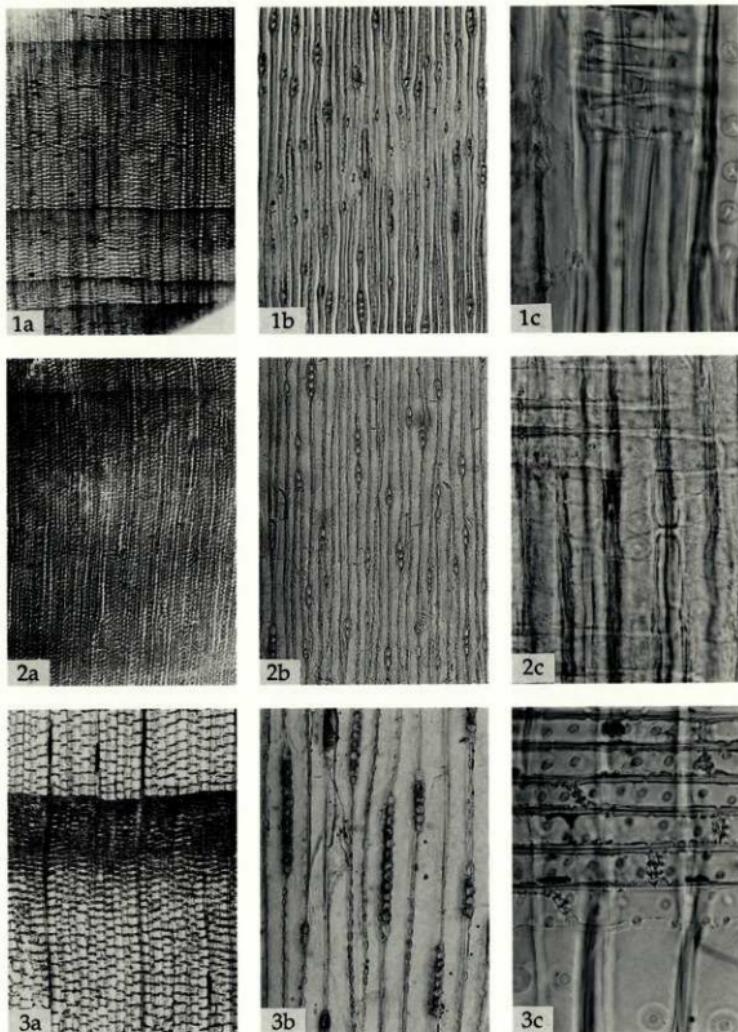


図1. 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の顕微鏡写真(1)

1 a - 1 c : マキ属 枝・幹材 (SHIM-281), 2 a - 2 c : イヌガヤ 枝・幹材 (SHIM-271),
3 a - 3 c : モミ属 枝・幹材 (SHIM-318). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×400.

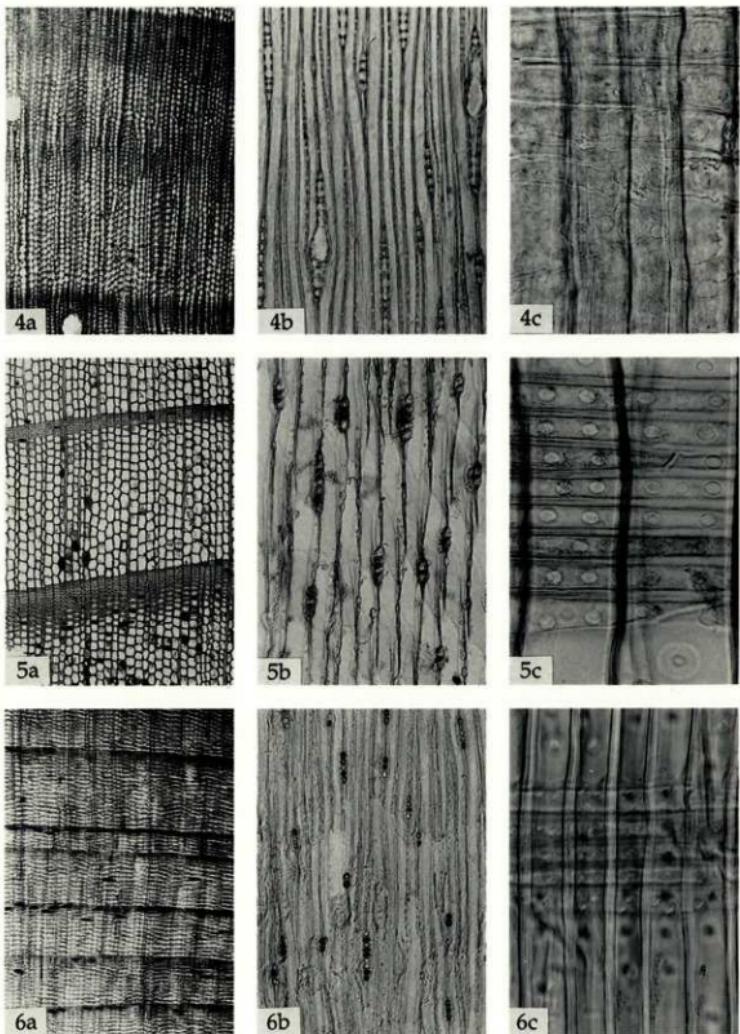


図2. 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の顕微鏡写真(2)

4 a - 4 c : マツ属複管束亞属 枝・幹材 (SHIM-313), 5 a - 5 c : スギ 枝・幹材 (SHIM-251),
6 a - 6 c : サワラ 枝・幹材 (SHIM-276). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×400.

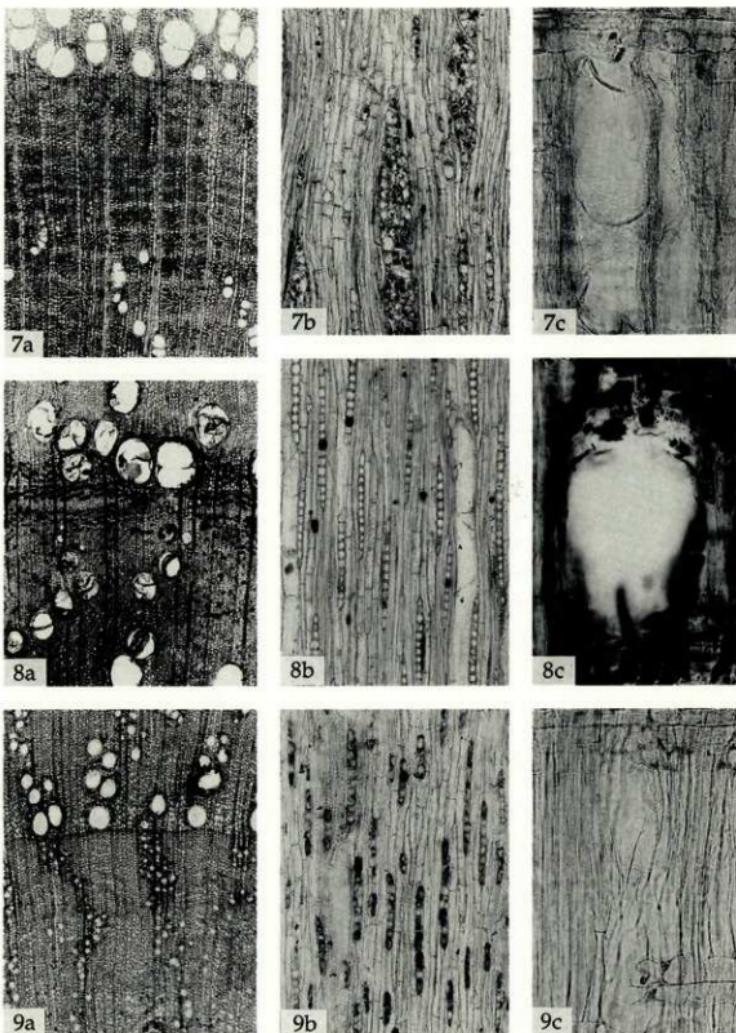


図3. 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の顕微鏡写真(3)

7a-7c: ノグルミ 枝・幹材 (SHIM-270), 8a-8c: クリ 枝・幹材 (SHIM-298),
9a-9c: スダジイ 枝・幹材 (SHIM-293). a: 横断図×40, b: 接線断面×100, c: 放射断面×200.

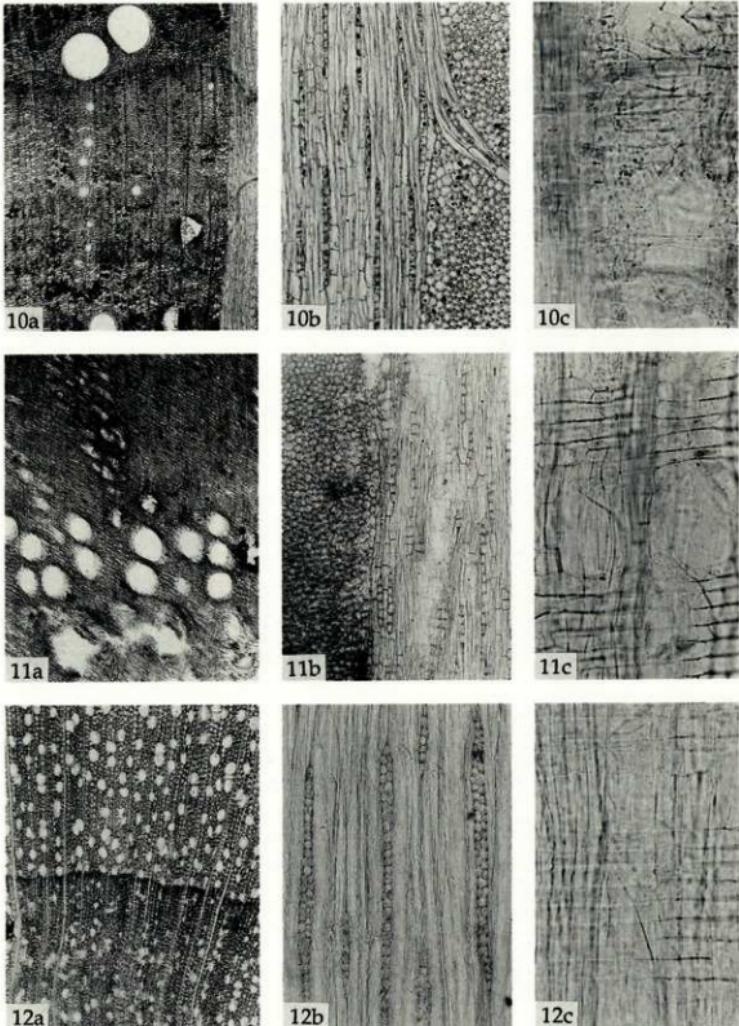


図4. 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の顕微鏡写真(4)

10a-10c:コナラ属クヌギ節 枝・幹材 (SHIM-294), 11a-11c:コナラ属コナラ節 枝・幹材 (SHIM-259), 12a-12c:モクレン属 枝・幹材 (SHIM-321), a:横断面×40, b:接線断面×100, c:放射断面×200.

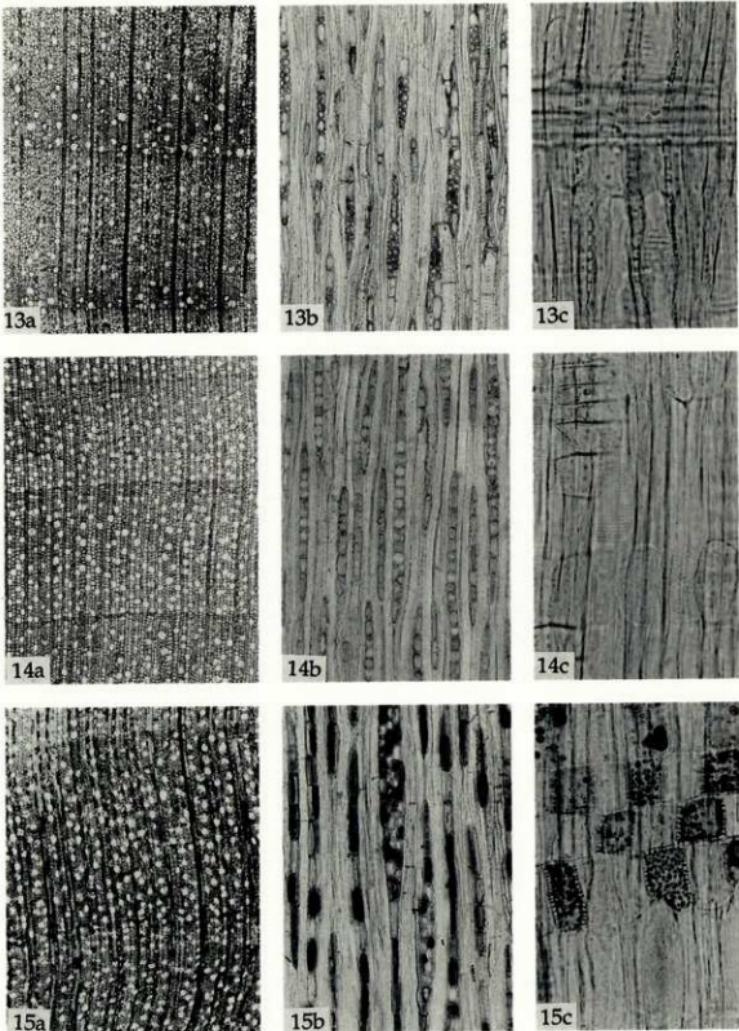


図5. 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の顕微鏡写真(5)

13a-13c : ツバキ属
枝・幹材 (SHIM-254),
14a-14c : サカキ
枝・幹材 (SHIM-301),
15a-15c : ヒサカキ
枝・幹材 (SHIM-323),
a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

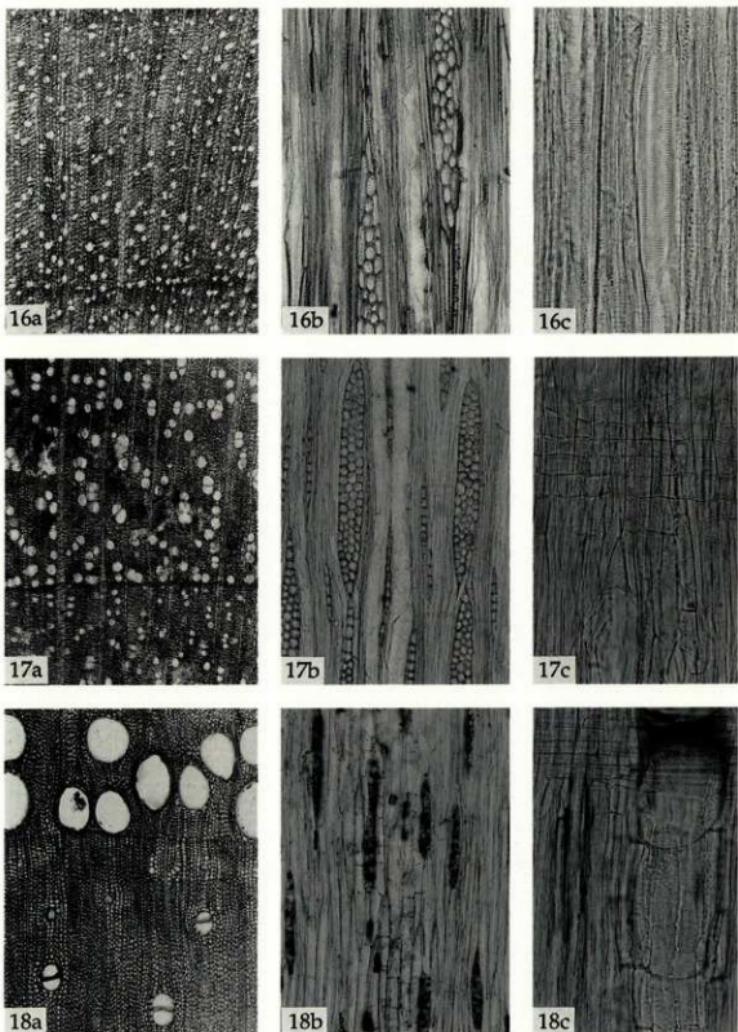


図6. 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の顕微鏡写真(6)

16a-16c: ウツギ属 枝・幹材 (SHIM-279), 17a-17c: サクラ属 枝・幹材 (SHIM-283),
18a-18c: ネムノキ属 枝・幹材 (SHIM-319). a: 横断面×40, b: 接線断面×100, c: 放射断面×200.

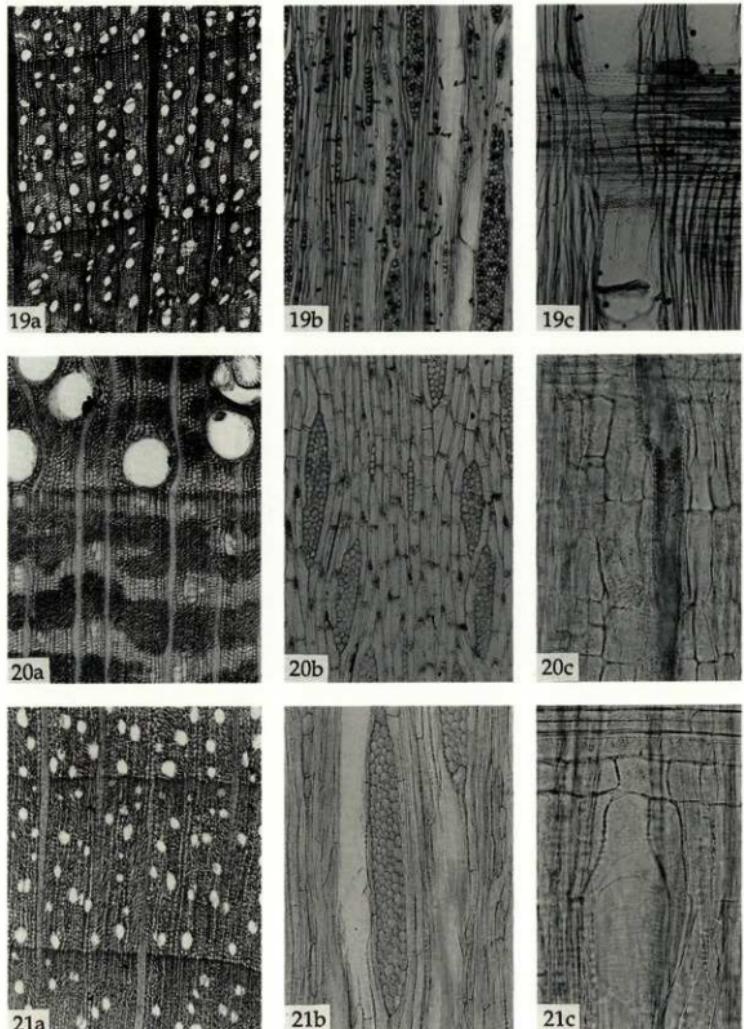


図7. 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の顕微鏡写真(7)

19a-19c : カエデ属 枝・幹材 (SHIM-322), 20a-20c : ムクロジ 枝・幹材 (SHIM-292),
21a-21c : リョウブ 枝・幹材 (SHIM-295), a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

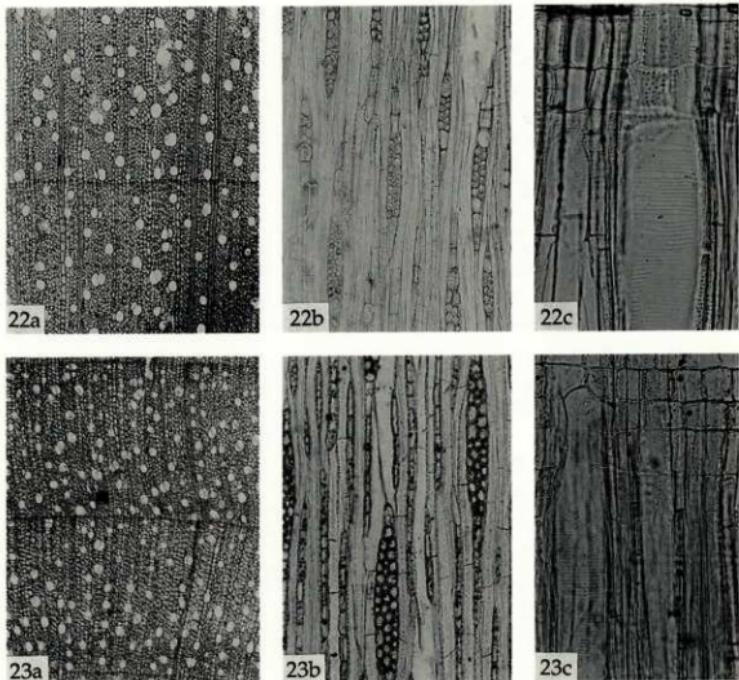
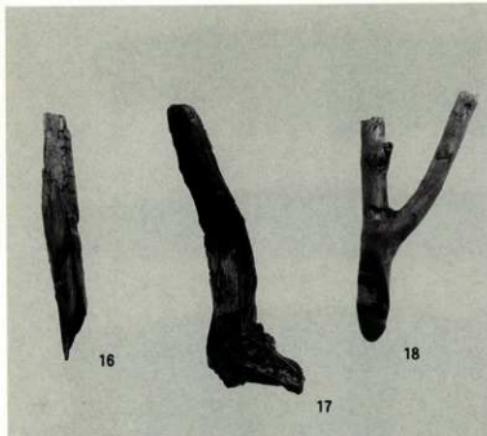
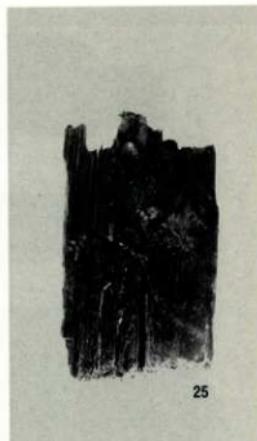


図8. 島根大学構内遺跡第6・7次調査出土木材の顕微鏡写真(8)

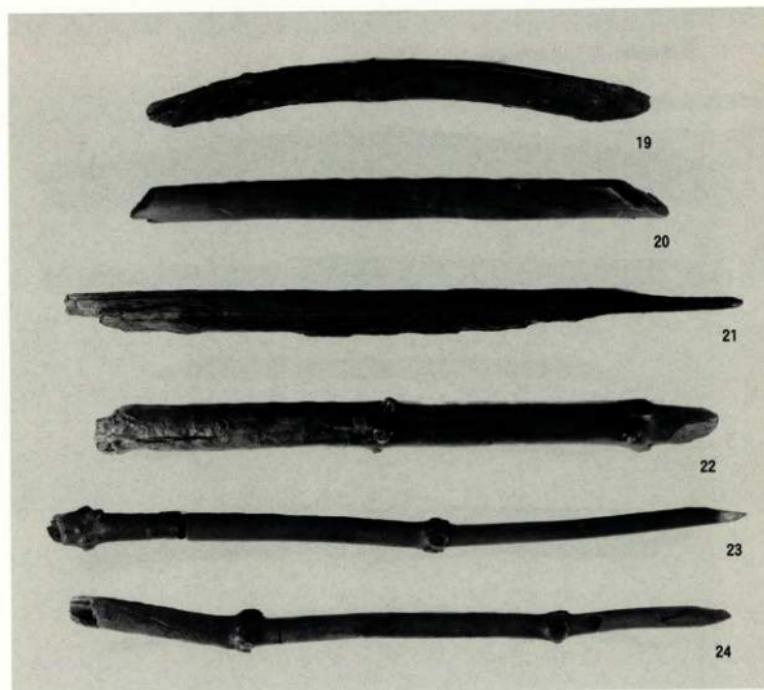
22a-22c : サワフタギ 枝・幹材 (SHIM-255), 23a-23c : ガマズミ近似種 枝・幹材 (SHIM-303),
a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.



1. 自然流路02出土木製品 (1／3)

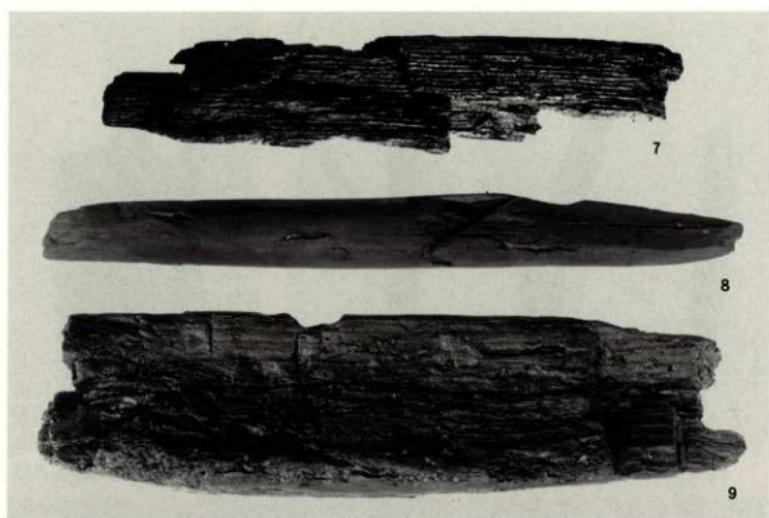


3. 自然流路03出土木製品 (1／3)

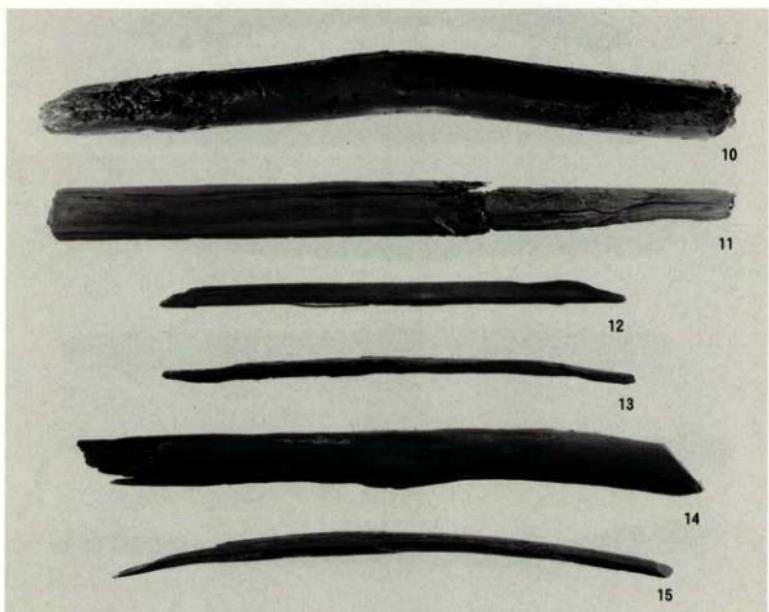


2. 自然流路02出土木製品 (1／6・24は1／8)

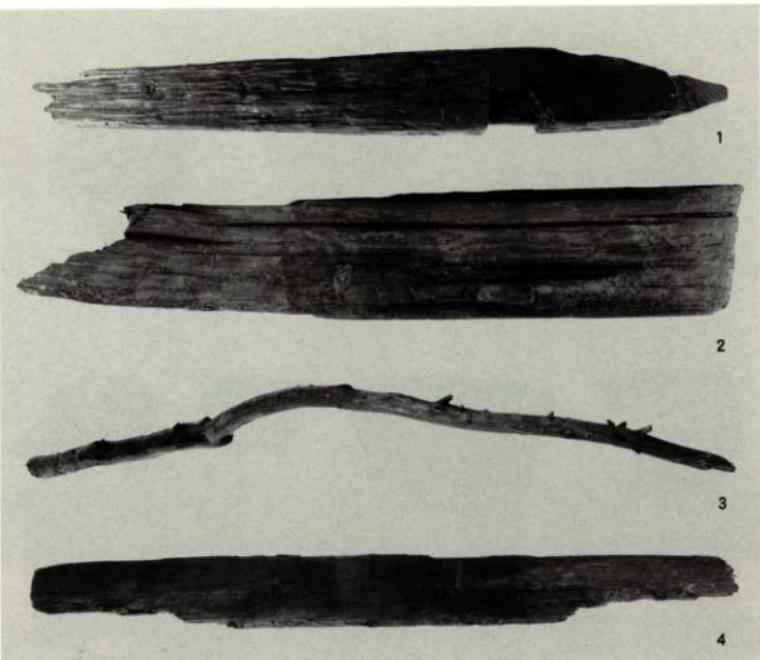
図版一三 遺物（第七次調査）



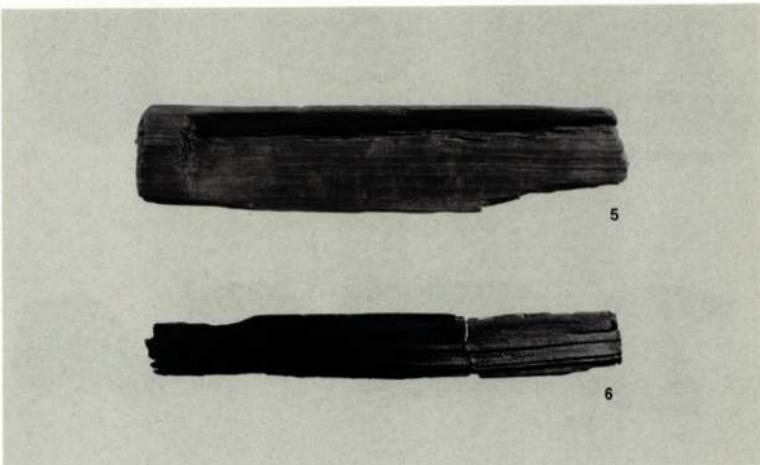
1. 自然流路01埋土出土木製品 (1／3)



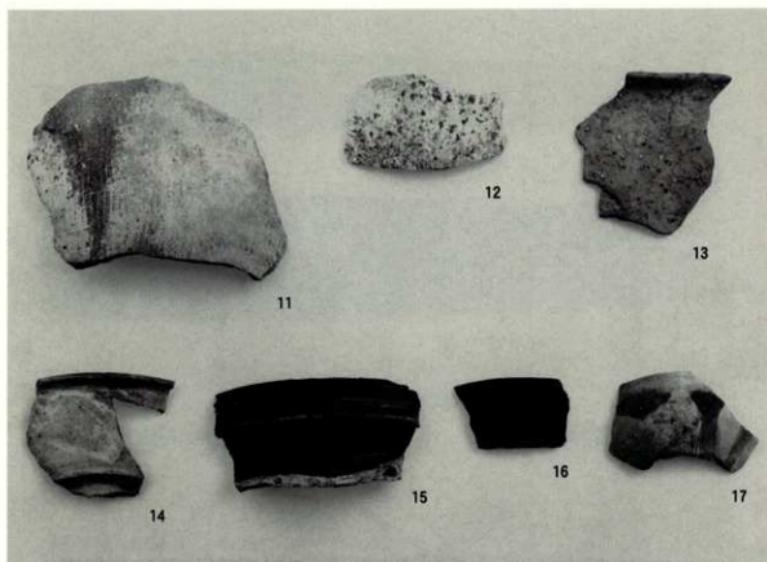
2. 自然流路01' 埋土出土木製品 (1／3・10は1／4)



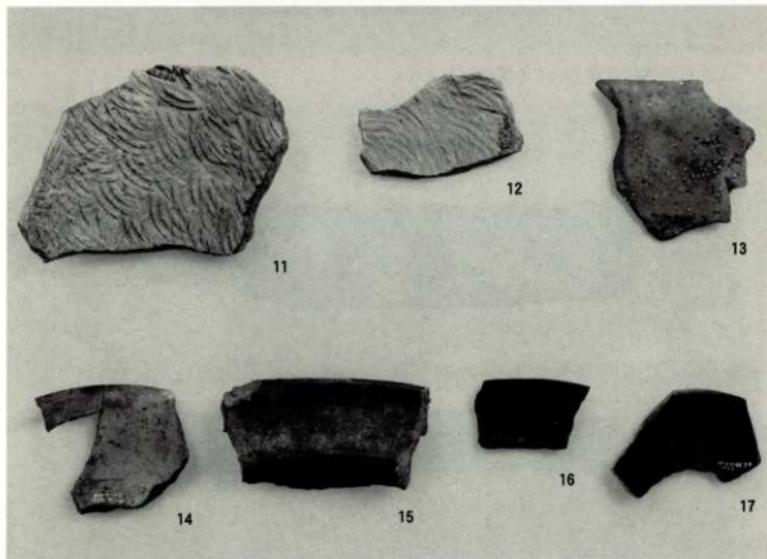
1. 自然流路01埋土出土木製品 (1 / 6)



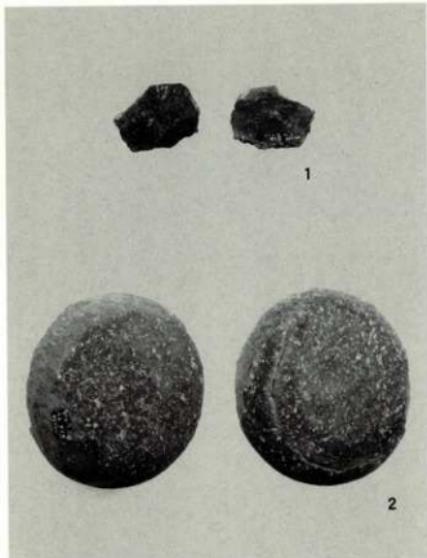
2. 自然流路01埋土出土木製品 (1 / 3 · 1 / 6)



1. 自然流路01・01'・02出土土器（外面、1／3）



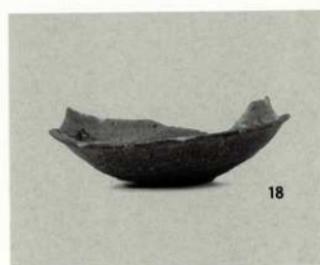
2. 自然流路01・01'・02出土土器（内面、1／3）



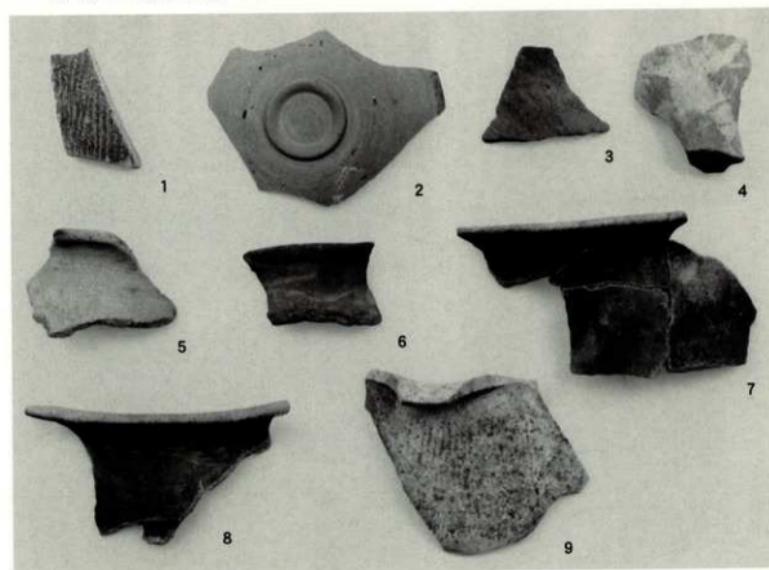
1. 第4a層出土遺物 (1/3)



2. 自然流路01出土土器 (1/3)



3. 第2層下位砂層出土土器 (1/3)



4. 第2層・自然流路01出土土器 (1/3)

図版九 遺跡（第七次調査Ⅲ区）



1. 第3層上面全景（南西から）



2. 調査区北壁断面（南から）



1. 自然流路02（北東から）



2. 自然流路02内杭群検出状態（M20～21グリッド、南西から）

図版七 遺跡（第七次調査I・II区）



1. 自然流路01埋土木製品出土状態（G 2グリッド、西から）



2. 自然流路01'（北東から）



1. 自然流路01内杭検出状態（E 2グリッド、西から）



2. 自然流路01埋土木製品出土状態（F 2グリッド、北西から）



1. 第3層上面全景（自然流路01、北から）



2. 自然流路01（J～Nグリッド、北から）

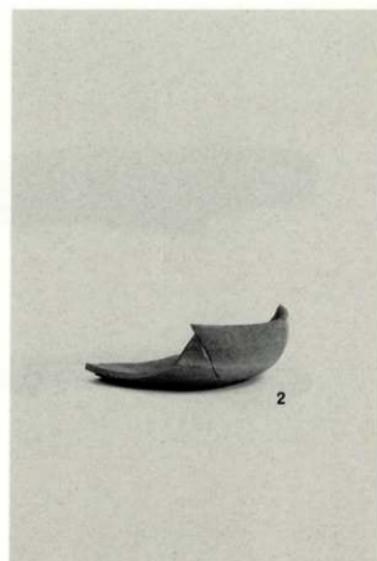


4

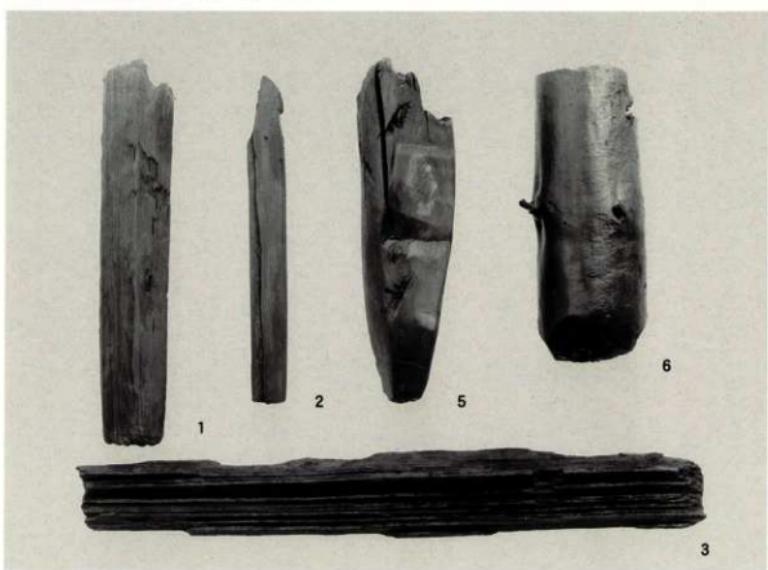


7

自然流路埋土出土木製品 (1/3・1/6)



1. 自然流路埋土出土土器 (1 / 3)



2. 自然流路埋土出土木製品 (1 / 3)



1. 第3層上面全景（東から）



2. 自然流路埋土遺物出土状態（北東から）



1. 調査区遠景（第3層上面、東から）



2. 調査区南壁断面（北東から）

島根大学埋蔵文化財調査研究報告 第3冊
島根大学構内遺跡第6・7次調査
(橋本地区1・2)

発行日 1999年2月26日

編集発行 島根大学埋蔵文化財調査研究センター

住 所 島根県松江市西川津町1060
〒690-8504 T E L (0852) 32-6496

印 刷 (株) 黒潮社
島根県松江市向島町182-3
